県営ほ場整備事業（入覚地区）関係埋蔵文化財発掘調査報告５

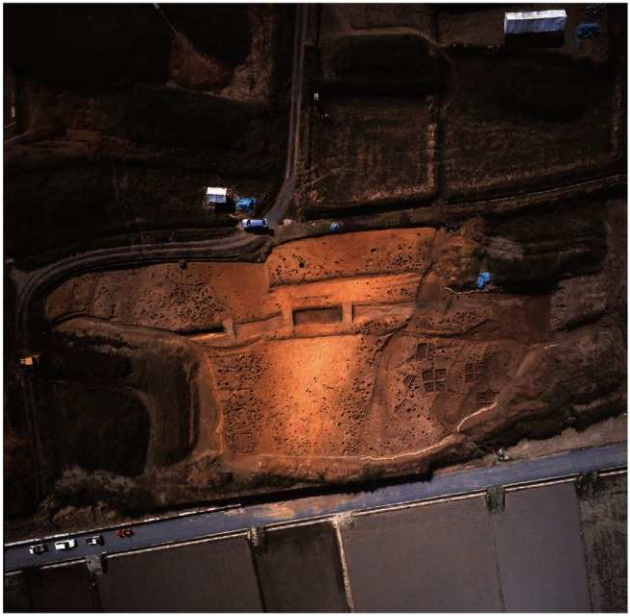
入 覚 大 原 遺 跡 2

行橋市文化財調査報告書　第 59 集

２０１６

行 橋 市 教 育 委 員 会

入覚大原遺跡E地区全景（南から）



入覚大原遺跡 E 地区全景（上が南西）

序

本書は、平成９年度に県営ほ場整備事業（入覚地区）の工事に先立ち実施しました、入覚大原遺跡Ｅ地区の発掘調査の報告書です。

遺跡の所在する入覚地区は京都平野北西部の低台地上にあたり、近辺には、別所古墳や椿市廃寺など多くの遺跡が知られています。今回の調査では弥生時代と古墳時代の多様な遺構、遺物を確認しましたが、この成果は当地周辺の地域史の解明に寄与する重要な成果と思われます。本書が学術研究はもとより埋蔵文化財への理解と認識を深めるために、広く活用されることを願います。

なお、発掘調査および報告書作成に当たって御協力いただいた、福岡県行橋農林事務所、入覚土地改良区、福岡県教育委員会、地元の方々をはじめとする関係各位に深く感謝いたします。

平成２８年３月

行橋市教育委員会
教育長　笹山 忠則

例　言

1．　本書は、福岡県行橋市大字入覚字大原 2845 ほかに所在する入覚大原遺跡Ｅ地区の発掘調査報告書である。県営ほ場整備事業（入覚地区）の工事に伴い、国、県の補助を受け、平成９年度に発掘調査を実施した。

2．　調査および報告書作成は、行橋市教育委員会が主体となって行った。

3．　遺構実測は赤波江静代、岩鹿美恵、門田早苗、辛嶋智恵子、古賀みどり、嶋田幸美、塚内トシエ、中園満子、古木初子、三井恭子、森脇世津子、吉田みゆき、吉原トヨ子が行った。

4．　遺構写真は辛嶋が撮影した。空中写真撮影は株式会社スカイサーベイに委託した。

5．　遺構図の整理は松本まゆみ、山口裕平が行った。

6．　遺物の接合・復元は枝吉恵美、佐々木豊子が行った。

7．　遺物の実測は鎌田尚子、定野美津子、松本、山口が行った。

8．　遺物写真は山口が撮影した。

9．　遺構・遺物図面の浄書は松本が行った。

１０．本書に使用した遺構の略号は SI（竪穴建物）、SB（掘立柱建物）、SK（土坑）、SD（溝）、SP（柱穴）である。

１１．本書に使用した方位は、磁北である。

１２．報告した遺物、図面、写真は行橋市教育委員会において保管している。

１３．本書の執筆および編集は、松尾留衣、松本の協力を得て山口が行った。

本 文 目 次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査の経緯と経過 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　入覚大原遺跡Ｅ地区 …… 5
第４章　結語 …… 47

図 版 目 次

巻頭図版１　入覚大原遺跡Ｅ地区全景（南から）
巻頭図版２　入覚大原遺跡Ｅ地区全景（上が南西）
図　版　１　入覚大原遺跡の位置
図　版　２　１．調査区南東側（上が南）
　２．調査区南西側（上が南）
図　版　３　１．調査区北東側（上が南）
　２．調査区中央部（上が南）
図　版　４　１．調査区北西側（上が南）
　２．SI009・010 周辺（上が南）
図　版　５　１．SI001（西から）
　２．SI002（西から）
　３．SI003（西から）
図　版　６　１．SI004、SK018（北東から）
　２．SI005（南から）
　３．SI005 土器出土状況
図　版　７　１．SI006（南東から）
　２．SI007、SK022（西から）
　３．SI008（南東から）
図　版　８　１．SI009（西から）
　２．SI010、SD031（南から）
　３．SI011（西から）
図　版　９　１．SK019（南西から）
　２．SK020（南東から）
　３．SK023（西から）
図　版　10　１．SD025 東側土層（東から）
　２．SD025 中央部土層（西から）
　３．SD025 西側土層（西から）

図 版 11　1．SD026（北から）
2．SD028（北西から）
3．SI006、SD029（東から）
図 版 12　1．SP038 鉄鏃出土状況
2．発掘作業の様子
3．調査前（南から）
図 版 13　出土遺物 1
図 版 14　出土遺物 2
図 版 15　出土遺物 3
図 版 16　出土遺物 4
図 版 17　出土遺物 5
図 版 18　出土遺物 6
図 版 19　出土遺物 7
図 版 20　出土遺物 8
図 版 21　出土遺物 9
図 版 22　出土遺物 10

挿 図 目 次

第 1 図　入覚大原遺跡調査区域（1/8,000）
第 2 図　入覚大原遺跡の位置（1/2,000,000）
第 3 図　京都平野の主要遺跡分布図（1/80,000）
第 4 図　入覚大原遺跡調査区グリッド（1/2,000）
第 5 図　入覚大原遺跡 E 地区遺構配置図（1/300）
第 6 図　SI001・002 実測図（1/60）
第 7 図　出土土器実測図 1（1/3）
第 8 図　SI003・004、SK018 実測図（1/60）
第 9 図　SI005・006 実測図（1/60）
第 10 図　出土土器実測図 2（1/3）
第 11 図　SI007、SK022 実測図（1/60）
第 12 図　出土土器実測図 3（1/3）
第 13 図　SI008・009 実測図（1/60）
第 14 図　出土土器実測図 4（1/3）
第 15 図　SI010 実測図（1/60）
第 16 図　出土土器実測図 5（1/3）
第 17 図　SI011 実測図（1/60）
第 18 図　出土土器実測図 6（1/3）
第 19 図　SB012・013 実測図（1/60）
第 20 図　SB014・015 実測図（1/60）
第 21 図　SB016・017 実測図（1/60）

第 22 図　出土土器実測図７（1/3）
第 23 図　SK019・020・021・023・024 実測図（1/60）
第 24 図　出土土器実測図８（1/3）
第 25 図　SD025 土層断面図（1/60）
第 26 図　出土土器実測図９（1/3）
第 27 図　出土土器実測図 10（1/3）
第 28 図　出土土器実測図 11（1/3）
第 29 図　出土土器実測図 12（1/3）
第 30 図　出土土器実測図 13（1/3）
第 31 図　出土土器実測図 14（1/3）
第 32 図　出土土器実測図 15（1/3）
第 33 図　出土石器実測図１（2/3）
第 34 図　出土石器実測図２（2/3）
第 35 図　出土石器実測図３（2/3）
第 36 図　出土石器実測図４（2/3）
第 37 図　出土石器実測図５（2/3）
第 38 図　出土鉄器・玉類実測図（1/2・1/1）

表目次

表 1　出土遺物観察表１
表 2　出土遺物観察表２
表 3　出土遺物観察表３
表 4　出土遺物観察表４
表 5　出土遺物観察表５
表 6　出土遺物観察表６

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯と経過

今回報告する入覚大原遺跡Ｅ地区は、県営ほ場整備事業入覚地区の工事に先立つ埋蔵文化財確認調査で発見された遺跡である。同事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成６年度（下崎ヒガンデ遺跡）、平成８・９年度（入覚大原遺跡・天サヤ池西古墳群・下崎瀬戸溝遺跡）、平成 11 年度（別所古墳）、平成 12 年度（入覚上畔遺跡・入覚コウチ遺跡・入覚秋光遺跡）、平成 15 年度（下崎丸山遺跡・下崎三反間遺跡）と、断続的に行ってきた。上記のとおり入覚大原遺跡は平成８・９年度の２箇年にわたり発掘調査を行ったが、それぞれ前年度に行った試掘調査で、幸ノ山南麓に広がる谷底平野（標高 30m 前後）で高密度に展開する遺構群を確認し、小字名より入覚大原遺跡（遺跡番号 14124025）と名付けている。このことより事業主体である福岡県行橋農林事務所及び入覚土地改良区と協議を行い、工事で削平される部分を対象に記録保存のための発掘調査を実施する運びとなった。入覚大原遺跡の調査面積は 14,400㎡（うちＥ地区 2,960㎡）である。

Ｅ地区の発掘調査は平成９年６月４日より開始した。まず重機で遺構の検出を行い、６月 10 日からは人力による掘り下げを始めた。６月末には調査区内に 10 mのグリッドを設定し、縮尺 100 分の１で平板図（遺構配置図）の作成を開始した。併せて縮尺 20 分の１で遺構の実測も行っていった。遺構の写真撮影は 35mm 白黒フィルム、35mm カラーリバーサルフィルムを使用し、調査の進展に従い順次行った。遺構を完掘し終えた 10 月 25 日に空中写真撮影を行い、その後の補足調査を経て、11 月 17 日に現地における発掘調査を終了した。

遺物の復元や実測、遺構図の製図などの整理作業は、平成 10 年度より断続的に行ってきた。その後、これらの作業を山口裕平が担当し、平成 25 年度には調査報告書を刊行したが、紙幅の都合上、Ａ～Ｄ地区の４地点における調査成果の報告に留まり、Ｅ地区の報告は先延ばしとなった。その後、平成 27 年度に改めて整理作業を行い、本書を刊行する運びとなった。調査体制は次節に示す通りである。

第２節　調査体制

現地調査（平成９年度）

総　括	行橋市教育委員会	教育長	白石　壽
		教育次長	加来　博
調　査		生涯学習課長	永岡 正治
		生涯学習課 文化係長	西江 文敏
		生涯学習課 文化係	小川 秀樹
		生涯学習課 文化係	辛嶋 智恵子（調査担当）
		生涯学習課 文化係	伊藤 昌広
		生涯学習課 文化係	中原　博
庶　務		生涯学習課 文化係	丸山　剛

発掘調査作業員

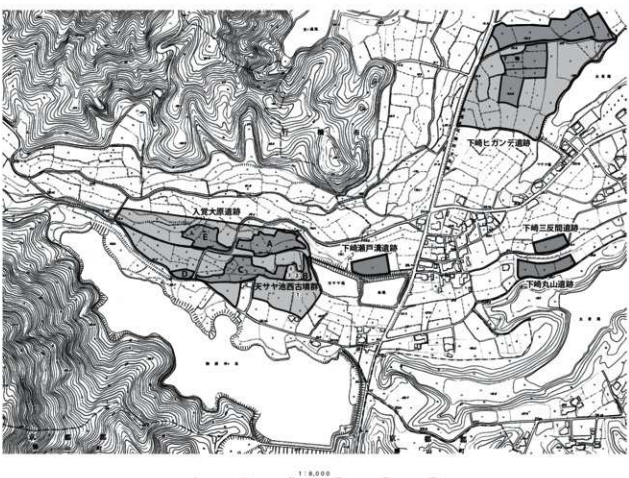
赤波江 静代　生永 勝美　井関 敬太　井関 俊喬　岩鹿 美恵　門田 早苗　門田 照美
川上 コマキ　木島 加代子　木下アヤ子　古賀 みどり　嶋田 チヅ子　嶋田 幸美
末永 美津子　高口 鈴美　竹中 幸　塚内 トシエ　中園 満子　中村 フジエ　中山 日出子
野田 洋子　信本 ノブ子　古門 ケン子　古木 初子　堀井 かおる　三井 恭子　宮下 信香
持永 文子　森脇 世津子　山田 イセ子　山中 キクエ　吉田 みゆき　吉原 トヨ子

報告書作成（平成 27 年度）

総　括	行橋市教育委員会	教育長	笹山 忠則
		教育部長	坪根 義光
調　査		教育部 文化課長	亀田 秀雄
		教育部 文化課 参事兼文化財保護係長	小川 秀樹
		教育部 文化課 文化財保護係	中原　博
		教育部 文化課 文化財保護係	山口 裕平（報告書担当）
		教育部 文化課 文化財保護係	天野 正太郎
庶　務		教育部 文化課 文化振興係長	高尾 信次郎（～ 10 月 30 日）
		教育部 文化課 文化振興係長	森　雅代（11 月 1 日～）
		教育部 文化課 文化振興係主任主査	森　雅代（～ 10 月 30 日）
		教育部 文化課 文化振興係主任主査	高尾 信次郎（11 月 1 日～）
		教育部 文化課 文化振興係	入生 佳奈
		教育部 文化課 文化振興係	田坂　彩

整理作業員

枝吉 恵美　奥野 康代　鎌田 尚子　佐々木 豊子　定野 美津子　松尾 留衣　松本 まゆみ



第 1 図　入覚大原遺跡調査区域（1/8,000）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

福岡県行橋市は県北東部に所在する（第２図）。この地域は旧郡名の頭文字を取り京築地方と呼ばれ、行橋市はその中心都市で人口 72,724 人（平成 28 年１月末日現在）を擁す。市域は京都平野の中央部を占め、東に周防灘を臨む。山地は少なく、南西部に馬ヶ岳〔216m〕、御所ヶ岳〔ホトギ山：246.9m〕などが東西に連なり、みやこ町豊津・犀川地域と市町境を画す。北九州市小倉南区と接する北西部は国指定特別天然記念物の平尾台カルストの石灰岩台地が広がる。他に観音山〔202m〕、幸ノ山〔178m〕、覗山〔121.7m〕など少数の独立山塊がある。市内には霊峰・英彦山を源とする今川、祓川をはじめ、小波瀬川、長峡川、江尻川、音無川などの中小の河川が流れ、周防灘に注ぐ。

本書で報告する入覚大原遺跡は、平尾台の南東の谷底平地および中位段丘、標高 30 m前後に所在する。

第２節　歴史的環境

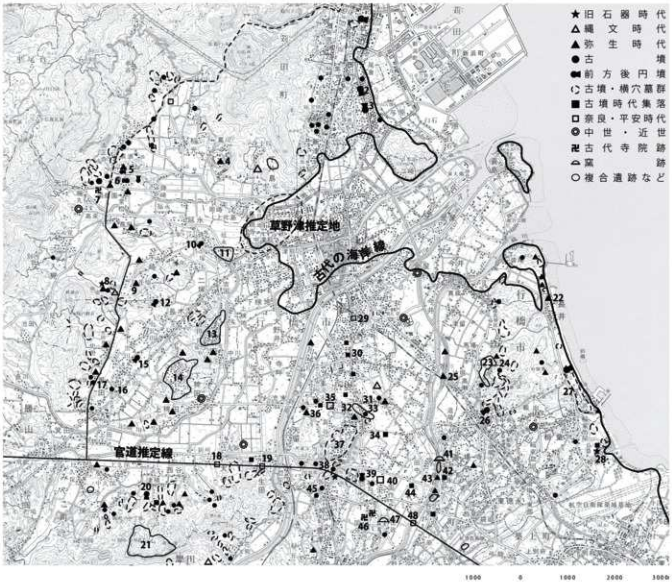
京都平野における人類の痕跡は、今からおよそ３万年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼり、市域では渡築紫遺跡Ｃ区で該期の石器および礫群が見つかっている。

続く縄文時代は、全国的に温暖化の影響で海進が発達した。そのピークは約 4800 年前頃で、現在の延永―津熊―大橋―今井―津留を結ぶラインがその頃の汀線と考えられている。この汀線は弥生時代以降若干海退するものの、江戸時代以来の干拓によって、蓑島と陸続きになるまで、京都平野は現在とは大きく異なる内湾性の臨海平野を形成していた（第３図）。縄文時代の遺跡は、遺構は不明確ながら、早期の押型文土器（竹並遺跡など）、後期の西平式系土器（下崎瀬戸溝遺跡）など各期の遺物が徐々に知られるようになって来た。

2500 年前頃を境に、生業の主体を狩猟採集とする縄文時代から稲作農耕とする弥生時代へと変化していく。この地域において遺跡が爆発的に増加するのは弥生前期後半からで、下稗田遺跡、前田山遺跡など大規模な集落が形成される。

３世紀後半頃に始まる古墳時代には九州で最大・最古級の畿内型前方後円墳である石塚山古墳が苅田町

第２図　入覚大原遺跡の位置(1/2,000,000)



1.石塚山古墳　2.番塚古墳　3.御所山古墳　4.葛川遺跡　5.黒添メウト塚古墳　6.椿永丸山古墳
7.椿市廃寺　8.**入覚大原遺跡**　9.下崎丸山遺跡　10.ビワノクマ古墳　11.延永ヤヨミ園遺跡　12.八雷古墳
13.前田山遺跡　14.下樽田遺跡　15.庄屋塚古墳　16.橘塚古墳　17.綾塚古墳　18.大谷車堀遺跡
19.天生田大池遺跡　20.片峰1号墳　21.御所ヶ谷神籠石　22.長井遺跡　23.代遺跡　24.馬場代2号墳
25.辻垣遺跡　26.隼人塚古墳　27.稲童古墳群　28.渡築紫遺跡　29.崎野遺跡　30.福富小畑遺跡
31.侍塚遺跡　32.竹並下ノ原遺跡　33.ヒメコ塚古墳　34.鬼熊遺跡　35.福原長者原遺跡　36.矢留堂ノ前遺跡
37.竹並遺跡　38.甲塚方墳　39.惣社古墳　40.豊前国府跡　41.居屋敷窯跡　42.鵜先遺跡
43.椿永川ノ上遺跡　44.京ヶ辻遺跡　45.彦椿甲塚古墳　46.豊前国分寺跡　47.椿政瓦窯跡　48.弊見樋ノ口遺跡

第3図　京都平野の主要遺跡分布図（1/80,000）

域に築かれ、その海浜部で前期から中期への首長墓系譜を辿ることができる。後期には京都平野内陸部に移動し、市内では八雷古墳が6世紀前半の首長墓と考えられる。7世紀になると全国的に古墳築造も停止傾向にあり古墳時代の終末期に入るが、京都平野では古墳時代終末期になっても古墳築造が盛行する。市内では福丸古墳群、渡築紫古墳群などが調査されている。この時代は古代史の上では飛鳥時代であり、仏教文化が地方にも根付き始めた頃である。市内では椿市廃寺が建立された。またこの頃、対大陸・半島情勢の悪化に伴い、津積に古代山城である御所ヶ谷神籠石が築かれた。泉地区の福原長者原遺跡は東西幅150ｍの区域をもつ8世紀前半を主体とする官衙遺跡で、奈良時代の豊前国府の可能性も指摘されている。

本書で報告する入覚大原遺跡E地区は、弥生時代中期および古墳時代後期の遺跡である。

第３章　入覚大原遺跡Ｅ地区

入覚大原遺跡Ｅ地区は、行橋市大字入覚 2845、2846、2852－1、2853－1、2854、2855－1、2855－2、2856 番地に所在する。標高 28.0 ～ 31.5m 前後の谷底平地および中位段丘に立地する。調査面積は 2,960㎡である。

調査の結果、弥生時代中期および古墳時代後期の遺跡を検出した（第５図）。遺構には竪穴建物 11 軒をはじめとして、掘立柱建物６棟、土坑や溝、多数の柱穴などがあり、遺物には弥生土器、土師器、須恵器、石鏃、石斧、石庖丁、石剣、砥石、刀子、鉄鏃、臼玉などがある。

遺構検出面（地山）は第四期層と呼ばれる泥や砂、礫からなる砂礫層で、黄褐色あるいは赤褐色を呈する。長峡川水系による扇状地堆積物で、径３～４㎝の円礫や亜円礫を多く含んでいる。基本層序は、調査地が棚田状に開削されていたこともあり、地山の残存状況も各所で異なるため、提示することは適わなかった。

（１）竪穴建物

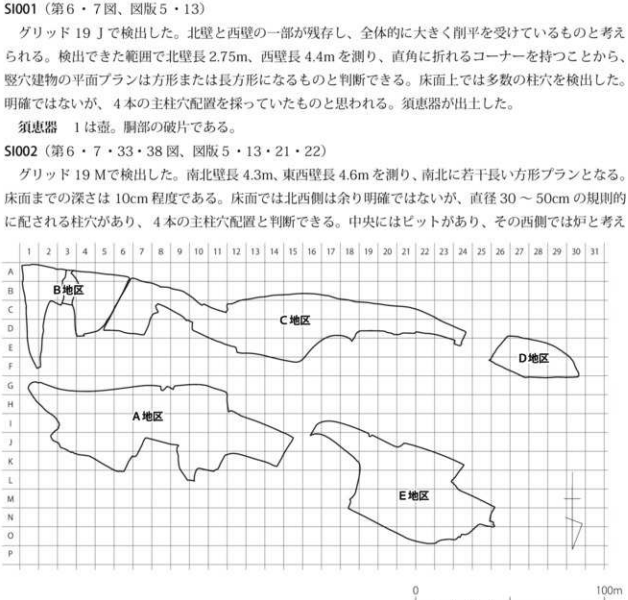
SI001（第６・７図、図版５・13）

グリッド 19 J で検出した。北壁と西壁の一部が残存し、全体的に大きく削平を受けているものと考えられる。検出できた範囲で北壁長 2.75m、西壁長 4.4m を測り、直角に折れるコーナーを持つことから、竪穴建物の平面プランは方形または長方形になるものと判断できる。床面上では多数の柱穴を検出した。明確ではないが、４本の主柱穴配置を採っていたものと思われる。須恵器が出土した。

須恵器　１は壺。胴部の破片である。

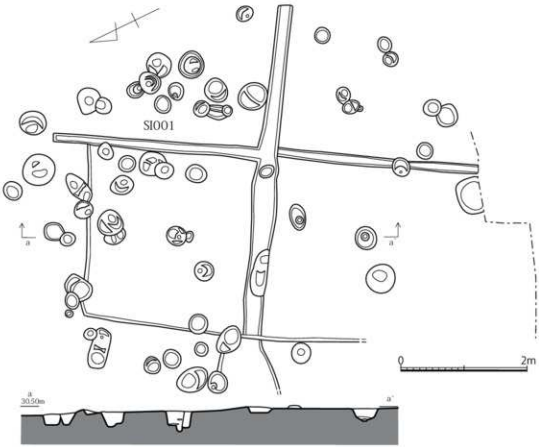
SI002（第６・７・33・38 図、図版５・13・21・22）

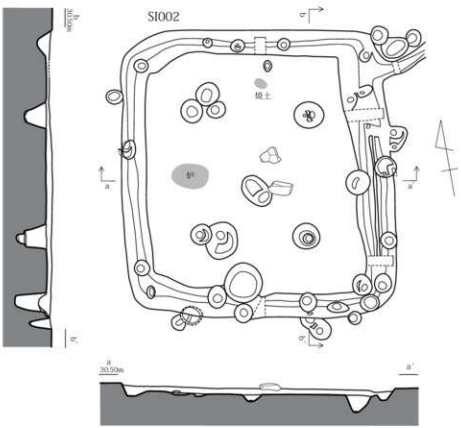
グリッド 19 M で検出した。南北壁長 4.3m、東西壁長 4.6m を測り、南北に若干長い方形プランとなる。床面までの深さは 10cm 程度である。床面では北西側は余り明確ではないが、直径 30 ～ 50cm の規則的に配される柱穴があり、４本の主柱穴配置と判断できる。中央にはピットがあり、その西側では炉と考え



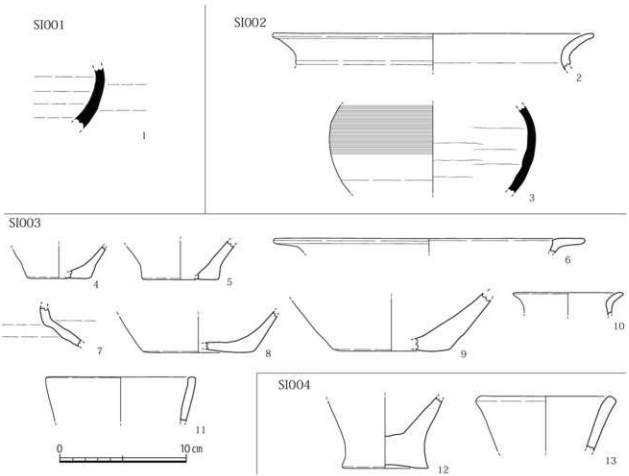
第４図　入覚大原遺跡調査区グリッド（1/2,000）

第５図　入覚大原遺跡Ｅ地区遺構配置図（1/300）





第 6 図　SI001・002 実測図（1/60）



第7図　出土土器実測図1（1/3）

られる焼土面を検出した。壁際には 40 ～ 70cm の幅で壁溝が四周に巡り、東側では一部二重になる。また北東隅部から屋外に向けて長さ 3.0m、幅 0.2m の排水溝が伸びる。出土遺物には土師器、須恵器、石鏃、鉄製刀子がある。

土師器　2は壺の口縁部片。復元口径 25.8cm を測る。

須恵器　3は壺あるいは瓶類。胴部片である。

石器　184 は打製石鏃。凹基式で先端部をわずかに欠く。サヌカイト製。

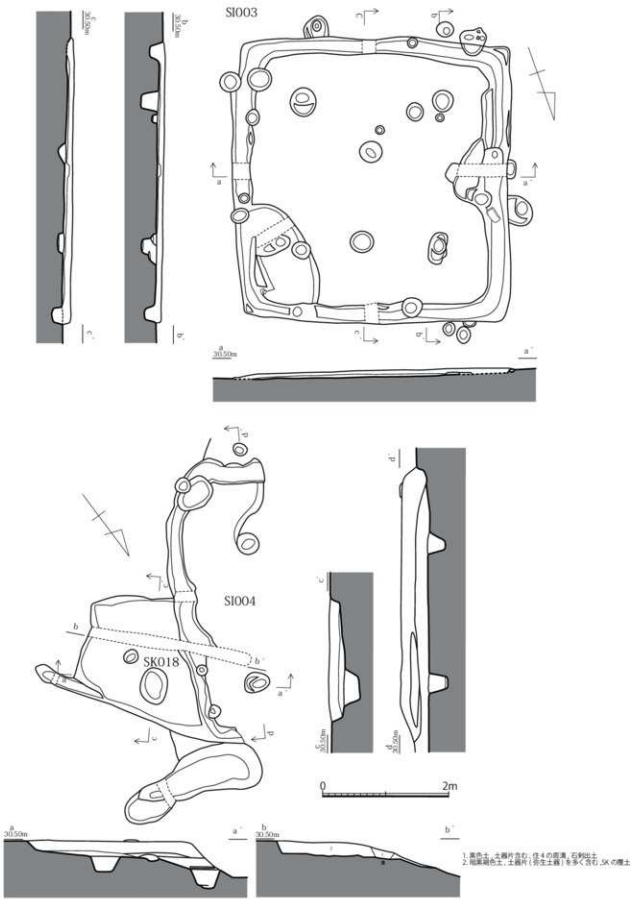
鉄器　210 は刀子。刃部、柄部を欠く関部の破片である。関はナデ関を呈す。残存長 4.7cm。

SI003（第7・8・33図、図版5・13・21）

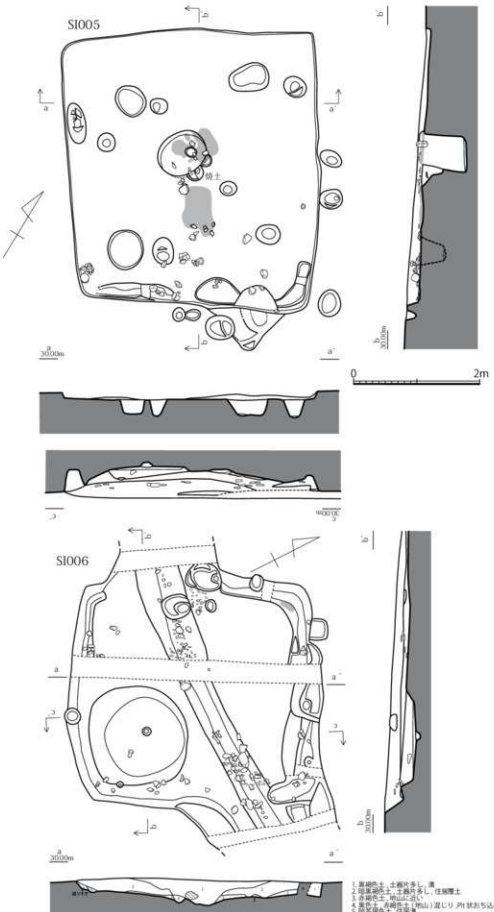
グリッド 18 N で検出した。SI002 の北側に接する。南北壁長 4.5m、東西壁長 4.4m を測り、正方形プランとなる。床面までの深さは 15cm 程度で、直径 30 ～ 40cm の規則的に配される柱穴があり、4本の主柱穴配置と判断できる。壁際には 20 ～ 35cm の幅で壁溝が四周に巡る。出土遺物には弥生土器、石鏃がある。

弥生土器　4・5は甕。いずれも平底の底部片。6～9は壺。6は広口壺と思われる口縁部片で、鋤形口縁となる。復元口径 24.8cm。高坏の可能性もある。7は頸部片。8・9は底部片。いずれもやや上底になると思われる。10 は鉢。口縁部片で端部は短くわずかに外反する。復元口径 8.8cm。11 は器台。上縁部の小片である。

石器　185 は打製石鏃。平基式で片脚をわずかに欠く。黒曜石製だが産地はよく分からない。186 は磨製石鏃。完形品で平基式である。サヌカイト製。



第8図　SI003・004、SK018 実測図（1/60）



第９図　SI005・006 実測図（1/60）

SI004（第７・８・33 図、図版６・13・21）

グリッド 22 M で検出した。SK018 を切る。西半部は削平を受けているが、東壁と南北壁が一部残る。東壁長は 4.4m、南北壁は検出できた範囲で北壁長 1.0m、南壁長 0.6m を測り、直角に折れるコーナーを持つことから、竪穴建物の平面プランは方形または長方形になるものと判断できる。床面上では直径 30 ～ 35cm の一対の柱穴を検出した。その配置から 4 本の主柱穴配置を採っていたものと思われる。壁際には 25 ～ 30cm の幅で壁溝が巡る。弥生土器、石剣、砥石が出土した。

弥生土器　12 は甕。やや上底の底部片。13 は器台。上縁部の小片である。

石器　187･188 は磨製石剣。187 は刃部の小片で、明確な鎬をもち断面はやや厚みのある菱形となる。泥質砂岩製。188 も刃部の小片で、先細りになることから切先に近い部位と考えられる。滑石片岩製のため、表面は摩滅しており明確な鎬はもたない。189 は砥石。小片で 4 面の砥面を残す。目は細かい。凝灰質細粒砂岩製。

SI005（第９・10 図、図版６・13）

グリッド 22 N で検出した。SB014 に切られる。北壁長 4.0m、南壁長 3.6m、西壁長 4.0m、東壁長 4.4m を測る。若干歪みがあるものの、正方形に近いプランを呈す。床面までの深さは 10cm 程度である。床面上には直径 30 ～ 60cm で規則的に配される 4 つの柱穴があり、4 本の主柱穴配置と判断できる。中央部付近には焼土が広く分布し、炉があったと想定できる。南壁から東壁にかけての壁際には 20 ～ 40cm の幅で壁溝が巡る。出土遺物には土師器、須恵器がある。

土師器　14・15 は高坏。14 は坏底部から脚部裾までの破片。脚部径は 8.5cm。15 は坏底部から脚部上半の破片である。16 は鉢。短く立ち上がる口縁部をもち、胴部はやや扁球状を呈す。17・18 は甕。17 は口縁部と底部を一部欠く。口径 10.45cm、器高 12.95cm の小型品である。18 はほぼ完形で、口径 14.1cm、器高 13.05cm と 17 より一回り大きい。19 は甑。口縁部から把手が付いた胴部上半の破片で、復元口径 30.8cm を測る。把手は牛角状を呈し、端部を丸く仕上げる。20 は器台。脚部を一部欠くが、遺存状態は良く、器高 9.9cm を測る。器壁は厚く、外面には指頭痕を残す。

須恵器　21 は坏蓋。3 分の 2 程度を残す破片で、復元口径 14.4cm、器高 5.0cm を測る。

SI006（第９・10・33 図、図版７・13・21）

グリッド 23 M で検出した。SD029 に切られるため、東壁と西壁の一部を欠失するが、北壁長 3.5m、南壁長 3.4m の正方形プランを呈す。床面までの深さは約 25cm である。床面上には上述の溝や浅い土抗があるのみで、主柱穴の配置は不明である。北壁から西壁にかけてと南壁の一部の壁際には、30 ～ 35cm の幅で壁溝が巡る。出土遺物には土師器、須恵器、石庖丁がある。

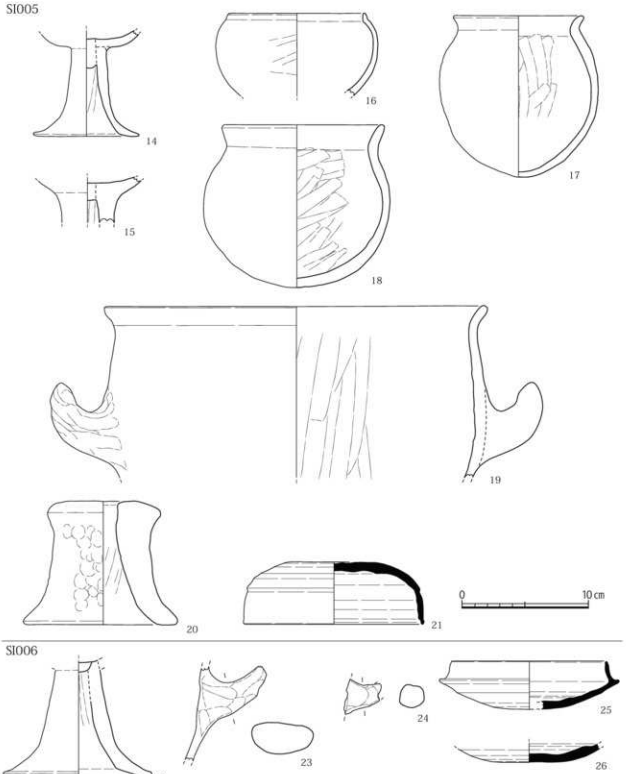
土師器　22 は高坏。坏底部から脚部裾の破片。23・24 は把手片。大きさと形状から 23 は甑、24 は埦と考えられる。

須恵器　25・26 は坏身。25 は 4 分の 1 程度を残し、復元口径 12.4cm、器高 3.85cm を測る。26 は底部片である。

石器　190 は石庖丁。背から刃部にかけての小片で、背も刃部も直線的である。石材は赤紫色泥岩（輝緑凝灰岩）を用いる。

SI007（第 11・12・33 図、図版７・14・21）

グリッド 23 N で検出した。SI006 に近接する。北西側が削平を受け、西壁の一部が SK022 に切られているが、南壁長 5.1m、東壁長 5.0m を測る。やや歪んだ正方形プランである。床面までの深さは 30 ～ 45cm 程度である。床面上には直径 40 ～ 50cm で規則的に配される柱穴があり、4 本の主柱穴配置と

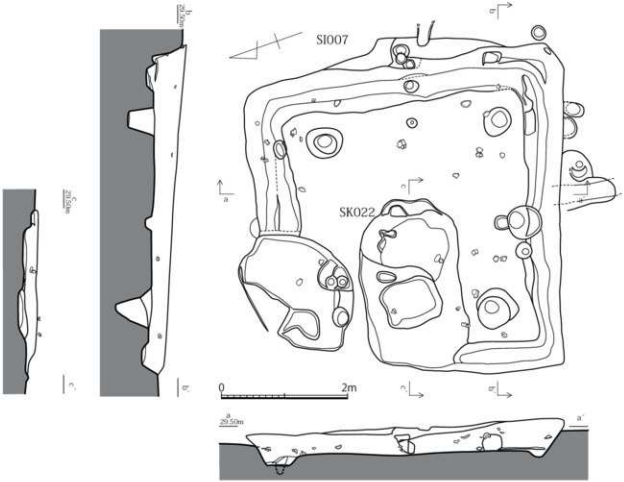


第 10 図　出土土器実測図2（1/3）

判断できる。中央部付近には焼土が広く分布し、炉があったと想定できる。北西側を除く壁際には 35 ～ 70cm の幅で壁溝が巡る。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、石剣がある。

弥生土器　27 ～ 30 は甕。いずれも底部の小片で、流れ込みによる混入と判断できる。

土師器　31 ～ 33 は高坏。31 は坏部片で復元口径 17.0cm を測る。32・33 は坏部と脚部の接合部の



第 11 図　SI007、SK022 実測図（1/60）

小片である。34 は壺もしくは甕の底部片で、丸底を呈す。35 は甕。４分の１程度の破片で、復元口径 15.6cm を測る。底部は平底気味である。36 ～ 39 は把手片。牛角状を呈し、断面の形状から 36・37 は甑、38・39 は把手付埦と考えられる。

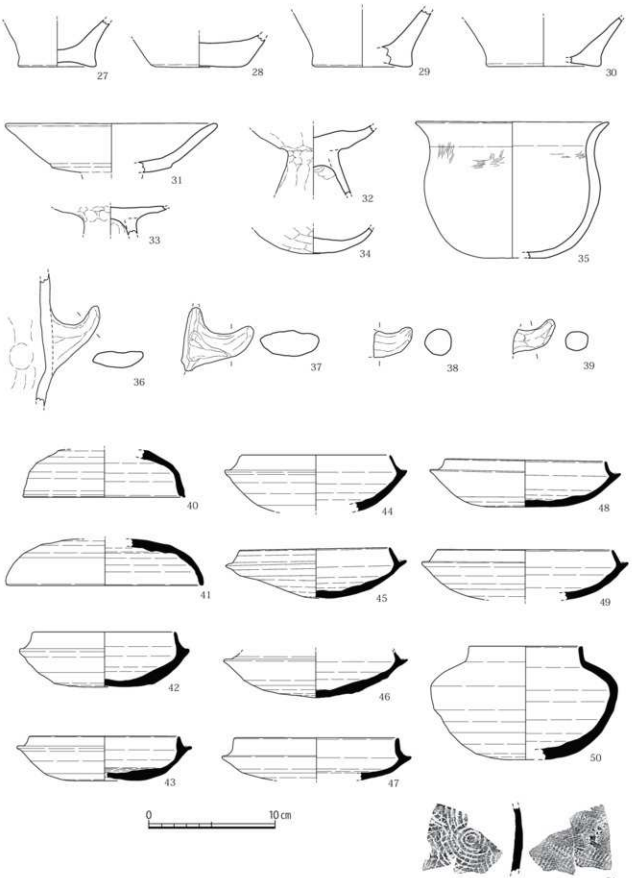
須恵器　40・41 は坏蓋。いずれも口縁部片で、40 は復元口径 13.0cm、41 は復元口径 15.9cm。42 ～ 49 は坏身。42 は２分の１程度の破片。復元口径 11.4cm、器高 4.4cm。43 は４分の１程度の破片で、復元口径 12.0cm、器高 3.55cm。44 は底部を欠く破片。復元口径 11.9cm。45 はほぼ完形だが歪みが著しい。口径 12.0cm、器高 4.0cm を測る。46 は口縁端部を欠く破片。47 は底部を欠く小片。復元口径 13.1cm。48 は２分の１程度の破片。復元口径 12.7cm、器高 3.85cm。49 は底部を欠く破片で、復元口径 14.2cm を測る。50 は短頸壺。口縁部は短く直行し、胴部は扁球状を呈す。３分の１程度の破片で、復元口径 9.1cm、器高 9.1cm。51 は甕。胴部の小片で、外面にカキメ、タタキを施し、内面に同心円文の当具痕を残す。

石器　191 は磨製石剣。基部の破片で切先を欠く。基部には茎は作り出さず、刃部幅が基部の幅となる。明確な鎬をもち刃部断面は扁平な菱形を呈す。基部には柄木装着のため２孔を穿孔する。石戈の可能性もある。石材は片状蛇文岩を用いる。

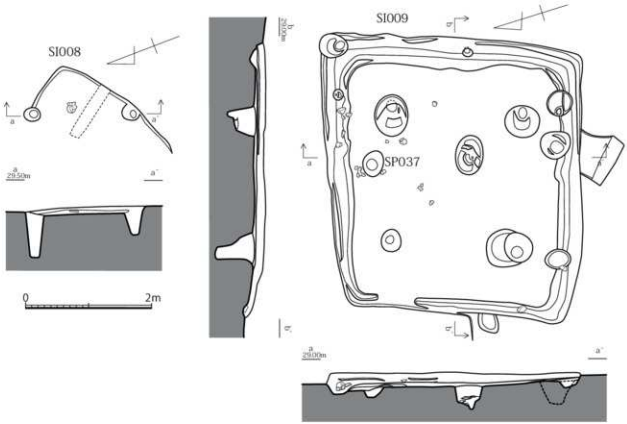
SI008（第 13・14 図、図版 7・15）

グリッド 22 O で検出した。北から西にかけては大きく削られているが、南壁と東壁の一部が遺存する。現状で南壁長 2.25m、東壁長 0.8m を測り、両壁が直角に折れるコーナーを持つことから、竪穴建物の平

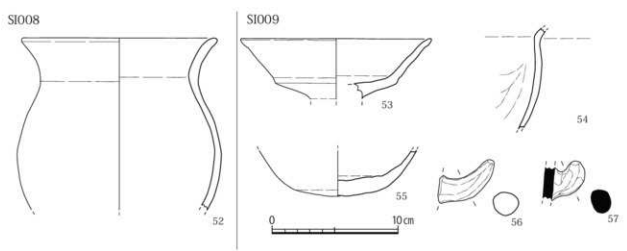
SI007



第12図　出土土器実測図3（1/3）



第 13 図　SI008・009 実測図（1/60）



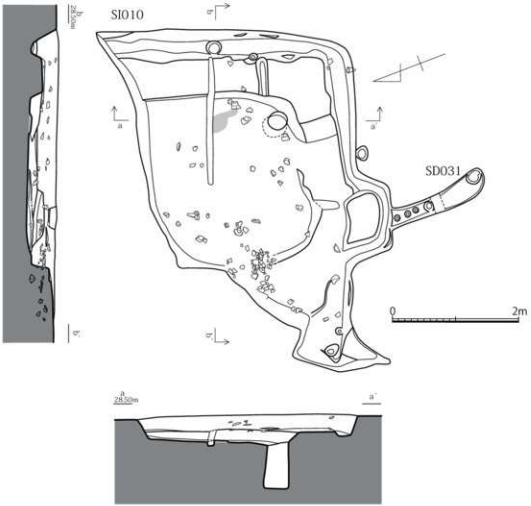
第 14 図　出土土器実測図4（1/3）

面プランは方形または長方形になるものと判断できる。床面までの深さは 10cm 程しかなく、床面上では主柱穴と判断できる柱穴は検出できなかった。出土遺物に土師器がある。

土師器　52 は甕。口縁部から胴部にかけての破片。復元口径 15.8cm を測る。

SI009（第 13・14・38 図、図版8・15・22）

グリッド 24 N で検出した。南北壁長 4.3m、西壁長 3.4m、東壁長 4.0m を測り、東西に若干長いやや歪んだ方形プランとなる。床面までの深さは 20cm 程度である。床面上には直径 30 ～ 50cm で規則的に配される 4 つの柱穴があり、4 本の主柱穴配置と判断できる。中央部付近には長軸 60㎝、短軸 40㎝の楕



第 15 図　SI010 実測図（1/60）

円形の柱穴が 1 基ある。西壁の一部を除き、壁際には 20 ～ 50cm の幅で壁溝が四方に巡る。出土遺物には土師器、須恵器、鉄製刀子がある。

土師器　53 は高坏。坏部片で復元口径 15.4cm を測る。54 は甕。頸部から胴部の破片。55 は甕ないし壺。底部片で丸底となる。56 は把手片。大きさと形状から把手付埦と判断できる。

須恵器　57 は把手片。56 と同様に把手付埦と考えられる。

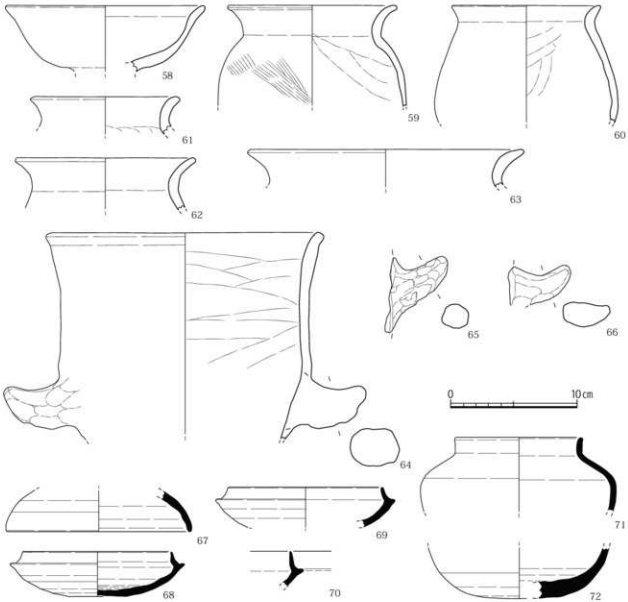
鉄器　211 は刀子。刃部の小片である。

SI010（第 15・16・33・34・38 図、図版 8・15・21・22）

グリッド 24 O で検出した。北から西側にかけて調査区外へと広がっており、現状で南壁長 5.0m、東壁長 4.0m を測る。両側壁が直角に折れるコーナーを持つことから、竪穴建物の平面プランは方形または長方形になるものと判断できる。床面までの深さは 25cm 程度で、真ん中には直径 2.8 m程の浅い土抗がある。その土抗の南東隅に主柱穴と考えられる直径 30cm の柱穴が 1 基あるのみで、主柱穴の配置は明確でない。検出できた範囲の壁際には 25 ～ 60cm の幅で壁溝が巡る。東壁の中央には長さ 0.6m、幅 1.5m の凸状の張り出しがあり、排水溝と考えられる SD031 を切っている。土師器、須恵器、砥石、白玉が出土した。

土師器　58 は高坏。坏部片で復元口径 16.0cm。59 ～ 63 は甕。59 は口縁部～胴部上半の破片で、復元口径 13.4cmを測る。60 も口縁部から胴部上半の破片。復元口径 12.0cm。61 ～ 63 はいずれも口縁部片。

SI010



第 16 図　出土土器実測図5（1/3）

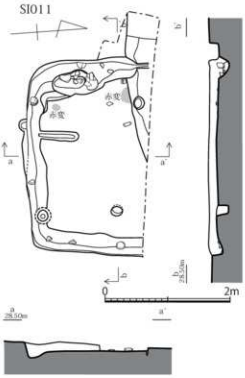
復元口径は 61 は 11.4cm、62 は 14.1cm、63 は 21.6cm である。64 は甑。口縁部から胴部中位にかけての破片で、分厚い牛角形の把手をもつ。復元口径 22.2cm。65・66 は把手片。大きさと形状から甑と判断した。

須恵器　67 は坏蓋。口縁部片で復元口径 14.8cm。68 ～ 70 は坏身。68 は 2 分の 1 程度の破片で、復元口径 12.0cm、器高 3.6cm を測る。69 は口縁部片。復元口径 12.4cm。70 は口縁部の小片である。71 は短頸壺。口縁部から胴部上半の破片で、短く直上する口縁をもつ。72 は壺。丸底をなす底部片で、71 と同一個体の可能性がある。

石器　192・193 は砥石。192 は砥面を 2 面残す小片で、石材は粗粒砂岩である。193 は 2 分の 1 程度を残すと想定される定形の砥石で、4 面の砥面を残す。長石斑岩製。

玉類　214 は滑石製の臼玉。直径 0.55cm、厚さは 0.3㎝である。断面形から片面穿孔と思われる。

SI011（第 17・18・34 図、図版 8・16・21）



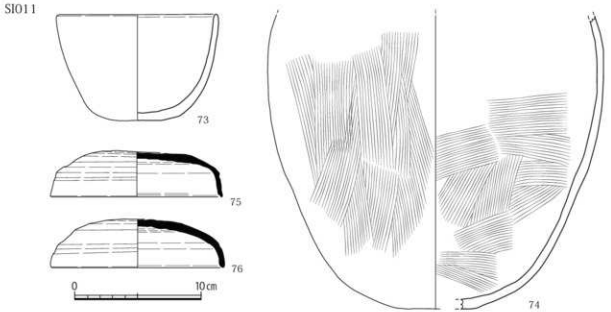
第 17 図　SI011 実測図（1/60）

グリッド 25 N で検出した。北側が調査区外へと広がっている。南壁長は 2.9m で、検出できた範囲で西壁長 1.85m、東壁長 1.75m を測る。側壁が直角に折れるコーナーを持つことから、竪穴建物の平面プランは方形または長方形になるものと判断できる。床面までの深さは 10cm 程度である。床面上には直径 20cm の柱穴が 2 基あるが、主柱穴とは判断できない。床面の一部は熱を受けて赤変する。検出できた範囲の壁際には 30 ～ 60cm の幅で壁溝が巡る。土師器、須恵器、石斧が出土した。

土師器　73 は鉢。口縁部を一部欠き、復元口径 12.8cm、器高 8.5cm。74 は甕。胴部中位から底部の破片である。内外面にハケを施して仕上げている。

須恵器　75・76 は坏蓋。75 はほぼ完形である。口径 13.8cm、器高 3.7cm を測る。76 は完形で、口径 14.0cm、器高 3.9cm を測る。

石器　194 は磨製石斧。いわゆる高槻型の太型蛤刃石斧で、刃部を欠損する。表面は風化している。安山岩質凝灰岩製。



第 18 図　出土土器実測図6（1/3）

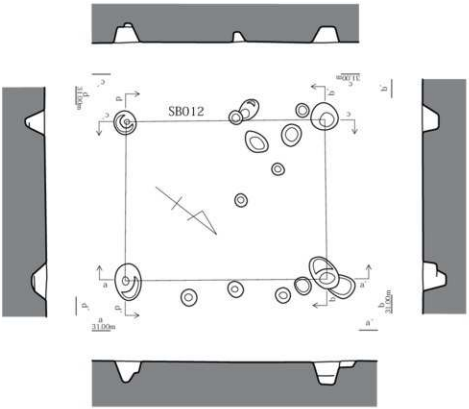
（2）掘立柱建物

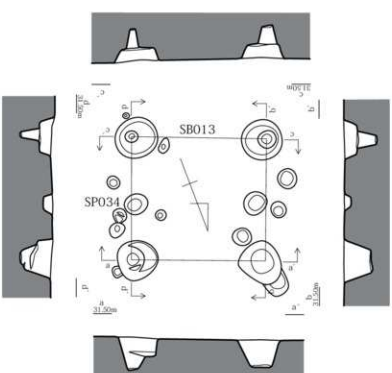
SB012（第 19 図、図版３）

グリッド 20 M で検出した。1 間× 1 間の掘立柱建物で、主軸方位を N － 38°－ W にとる。桁行は 3.2m、梁行は 2.5m を測る。長方形の平面プランとなる。柱穴は直径 35 ～ 55cm、深さ 25 ～ 35cm を測る。立て替えは行われていない。出土遺物は無かった。

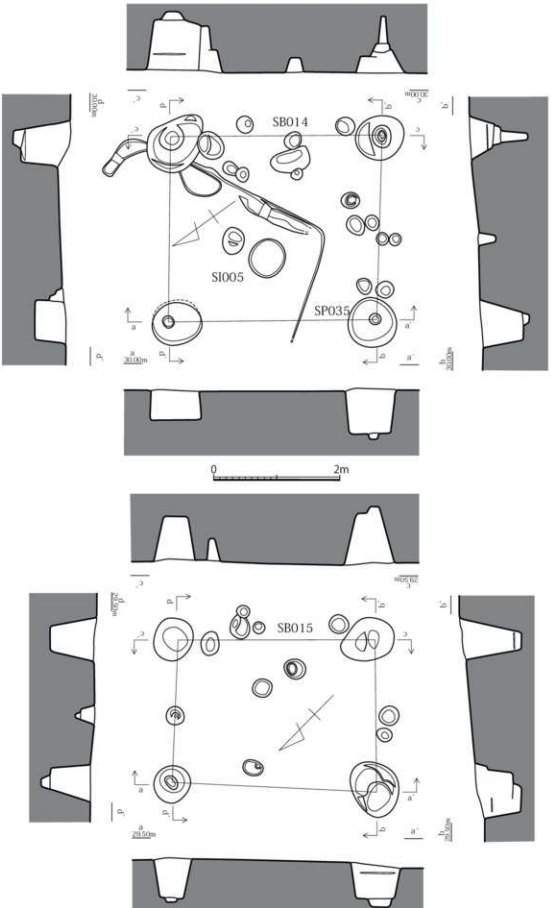
SB013（第 19 図、図版２）

グリッド 23 K で検出した。1 間× 1 間の掘立柱建物で、主軸方位を N － 68°－ W にとる。桁行は





第 19 図　SB012・013 実測図（1/60）



第 20 図　SB014・015 実測図（1/60）

2.15m、梁行は 1.95m を測る。正方形に近い平面プランとなる。柱穴は直径 65 ～ 70cm、深さ 45 ～ 50cm を測る。立て替えは行われていない。出土遺物は無かった。

SB014（第 20 図、図版 4）

グリッド 22 N で検出した。SI005 を切る。1 間× 1 間の掘立柱建物で、主軸方位をN － 35°－ E にとる。桁行は 3.35m、梁行は 2.9m を測る。長方形の平面プランとなる。柱穴は直径 70 ～ 85cm、深さ 45 ～ 90cm を測る。立て替えは行われていない。出土遺物は無かった。

SB015（第 20 図、図版 4）

グリッド 22 O で検出した。1 間× 1 間の掘立柱建物で、主軸方位は北側の柱列でN － 48°－ E にとる。桁行は北側で 3.25m、南側で 3.15m、梁行は東側で 2.25m、西側で 2.4m を測る。やや歪な長方形プランとなる。柱穴は直径 60 ～ 90cm、深さ 65 ～ 95cm を測る。立て替えは行われていない。出土遺物は無かった。

SB016（第 21 図、図版 4）

グリッド 23 M で検出した。SD029 を切る。1 間× 1 間の掘立柱建物で、主軸方位をN － 25°－ E にとる。桁行は東側 3.4m、西側で 3.6m、梁行は 2.6m を測り、長方形の平面プランとなる。柱穴は直径 50 ～ 100cm、深さ 30 ～ 85cm を測る。立て替えは行われていない。出土遺物は無かった。

SB017（第 21 図）

グリッド 25 M で検出した。1 間× 1 間の掘立柱建物で、主軸方位は東側の柱列でN － 16°－ E にとる。桁行は東側で 3.1m、西側で 3.2m、梁行は北側で 2.5m、南側で 2.65m を測る。やや歪な長方形プランとなる。柱穴は直径 50 ～ 60cm、深さ 30 ～ 40cm を測る。立て替えは行われていない。出土遺物は無かった。

（3）土坑

調査区では複数の土坑を検出したが、ここでは遺物が出土したものを中心に、主要なものだけを報告する。

SK018（第 8・22・35 図、図版 6・16・21）

グリッド 22 M で検出した。西側を SI004 に切られる。不整方形を呈し、現状で長軸 230cm、短軸 200cm、深さ 20cm を測る。弥生土器、砥石が出土した。

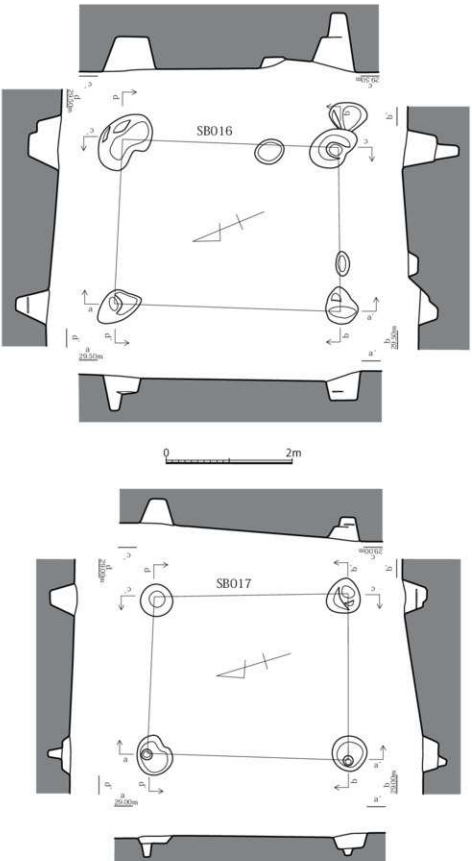
弥生土器　77 ～ 84 は甕。77 は口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁は鋤形で、砲弾形の胴部を呈したと考えられる。復元口径 23.0cm。78 も同様の破片。やや内傾させた鋤形口縁をもつ。復元口径 19.0cm。79・80 も口縁部片。くの字口縁で口縁直下に三角突帯を 1 条めぐらす。79 は口縁端部内面を跳ね上げて仕上げる。79 は復元口径 32.0cm を測る。81 ～ 84 は底部片。81・82 は上底で、83 はやや上底、84 は平底を呈す。85 ～ 87 は壺。85・86 は広口壺の口縁部片。85 は口縁部が鋤形を呈し、復元口径 27.9cm を測る。86 は素口縁で喇叭状に大きく開く形状となる。87 は底部片で平底となる。88・89 は高坏。いずれも口縁部片で、鋤形を呈する。88 は復元口径 26.2cm、89 は復元口径 26.6cm を測る。

石器　195 は砥石。破片で 4 面の砥面を残す。砂質凝灰岩製。

SK019（第 23・24 図、図版 9・16）

グリッド 22 M で検出した。円形を呈し、直径 110cm 程、深さ 30cm を測る。床面は広く熱を受けて赤変し、埋土には礫や炭化物が混じっていた。弥生土器が出土した。

弥生土器　90・91 は甕。90 は口縁部から胴部中位の破片。くの字口縁をもち、端部内面を跳ね上げて仕上げる。91 はやや上底の底部片。92 ～ 95 は壺。92・93 は広口壺。いずれも口縁部から頸部にかけての破片である。素口縁で喇叭状に大きく開く形状で、頸部に三角突帯を 1 条めぐらす。92 は復元口



第 21 図　SB016・017 実測図（1/60）

径 27.6cm を測る。94 は胴部上半から中位の破片。やや上位にしっかりとした三角突帯を２条めぐらす。95 は胴部中位から下半にかけての破片。胴部中位に三角突帯を２条めぐらす。96 は高坏。細い筒状をした脚部上半の破片で、坏部との接合部を残す。

SK020（第 23・24 図、図版９・17）

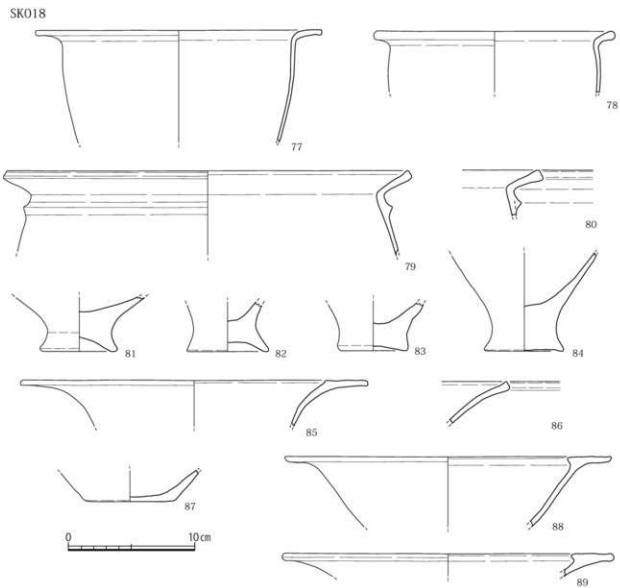
グリッド 22 N で検出した。隅丸方形を呈し、長軸 315cm、短軸 280cm、深さ 30cm を測る。床面には直径 20 ～ 30cm の柱穴が複数ある。弥生土器が出土した。

弥生土器　97 は甕。平底になる底部片。98 は高坏。口縁部片で鋤形を呈す。99 は器台。裾部の小片である。

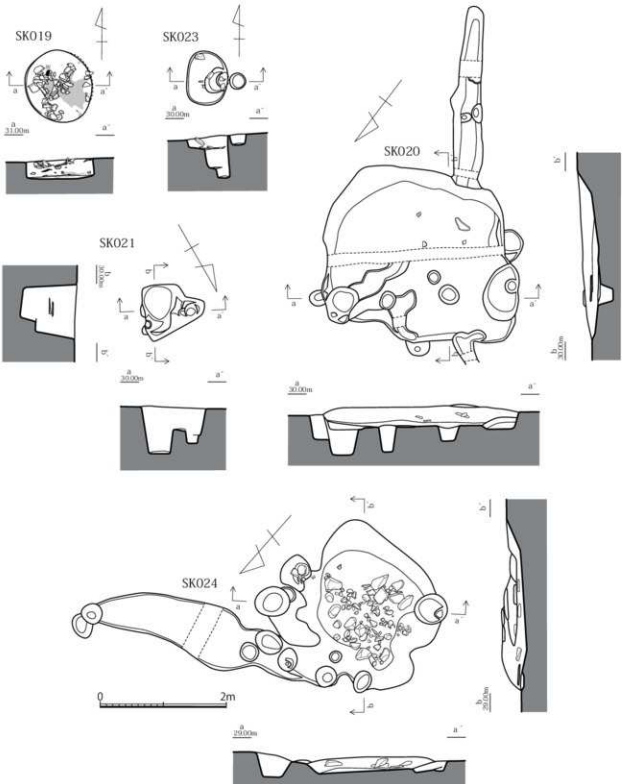
SK021（第 23・24 図、図版 17）

グリッド 22 N で検出した。SK020 のすぐ北側に接する。歪な三角形を呈し、一辺が約 80 ～ 100cm、深さ 75cm を測る。弥生土器が出土した。

弥生土器　100・101 は壺。100 は鋤形口縁の破片で、復元口径 33.0cmを測る。101 はやや上底とな



第 22 図　出土土器実測図7（1/3）

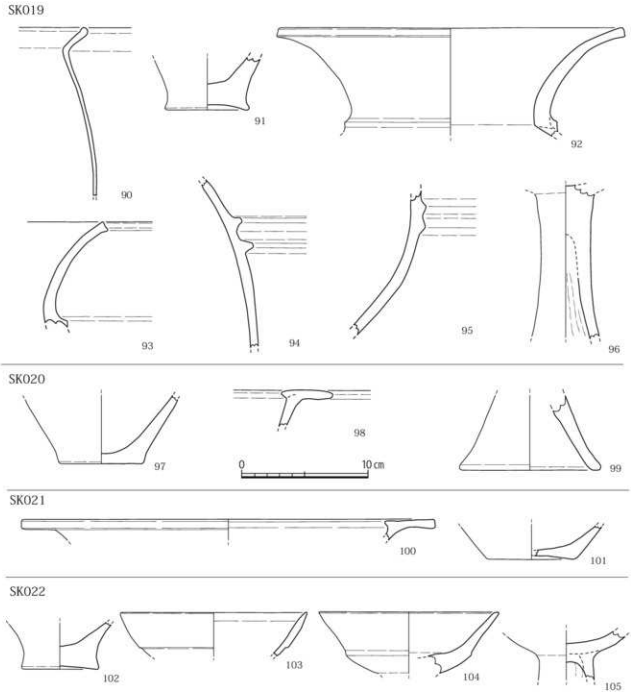


第 23 図　SK019・020・021・023・024 実測図（1/60）

る底部片。

SK022（第 11・24 図、図版 7・17）

グリッド 23 N で検出した。SI007 を切る。隅丸長方形を呈しており、長軸 260cm、短軸 155cm、深さ 30cm を測る。弥生土器、土師器が出土した。



第 24 図　出土土器実測図8（1/3）

弥生土器　102 は甕。底部片で混入したものと考えられる。

土師器　103 ～ 105 は高坏。103・104 は坏部片で、いずれも中位に段をもち、104 は底部にかけて肥厚する。103 は復元口径 15.0cm、104 は復元口径 14.4cm を測る。105 は坏部から脚部にかけての小片である。

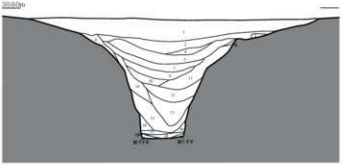
SK023（第 23・35 図、図版9・22）

グリッド 24 Mで検出した。楕円形を呈し、長軸 85cm、短軸 65cm、深さ 65cm を測る。石斧が出土した。

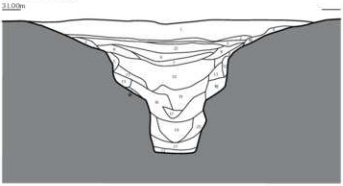
石器　196 は磨製石斧。刃部を一部欠くがほぼ完形である。両刃石斧で、基部の断面形は隅丸長方形である。砂岩ホルンフェルス製。

SK024（第 23・35 図、図版 22）

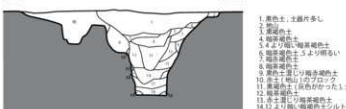
SD025 東側



SD025 中央部



SD025 西側



第 25 図　SD025 土層断面図（1/60）

グリッド 24 N で検出した。不整形な円形を呈し、直径約 250cm、深さ 15cm である。多くの礫に混じって石庖丁が出土した。

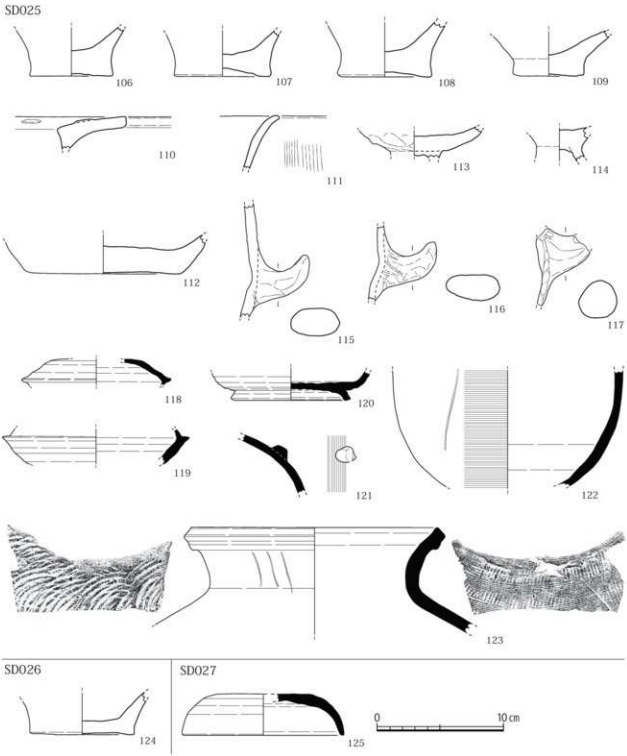
石器　197 は石庖丁。小片だが背と刃部も一部残っている。端部に紐を通す孔も 1 孔確認でき、両面から穿孔したことが分かる。凝灰質細粒砂岩製。

（4）溝

調査区では複数の溝を検出したが、ここでは遺物が出土したものを中心に、主要なものだけを報告する。

SD025（第 5 ・25・26・35 図、図版 10・17・22）

調査区を南北に隔てる大規模な区画溝で、南東から北西方向に伸びている。検出できた範囲で長さ 75m あり、西側は段の削平により遺存しない。なお東側は隣の調査区である A 地区まで伸びていることが分かっている（A 地区 SD016）。調査時には調査期間の都合および出土遺物が少ないことから東側を除いて完掘しておらず、中央部、西側はそれぞれ 1 箇所ずつトレンチを入れて土層確認を行うにとどめている（第 5 ・25 図）。調査区東側では上端幅 4.6m、底部幅 0.7m、深さ 1.9m を測る。溝底の幅が狭く、壁



第 26 図　出土土器実測図9（1/3）

面は急角度で立ち上がり、天端は緩やかな傾斜となる。埋土は自然堆積の様相を示す。中央部では上端幅 4.55m、底部幅 0.65m、深さ 2.05m を測る。やはり溝底の幅は狭く、壁面は急角度で立ち上がり、中位にわずかに段をもつ。天端は緩傾斜である。埋土は自然堆積の様相を示す。西側では上端幅 1.8m、底部幅 0.5m、深さ 1.3m を測る。東側や中央部に比べると溝の上端幅は狭い。同様に溝底の幅は狭く、壁面は天端まで急角度で立ち上がり、北側では中位に段をもつ。埋土は自然堆積の様相を示している。先述のように規模に比べて出土遺物は少ない。このことはA地区の調査でも同様である。弥生土器、土師器、須

恵器、石庖丁が出土した。

弥生土器　106 ～ 109 は甕。いずれも底部片で、107・108 はやや上底、106・109 は平底となる。110・111 は壺。いずれも広口壺の口縁部片ある。110 は鋤形を呈し、内面に円形付文をもつ。111 は素口縁である。

土師器　112 は甕。底部片で平底となる。113・114 は高坏。いずれも坏底部から脚部上半の破片である。115 ～ 117 は把手片。いずれも牛角状を呈し、断面形は 115・116 は扁球状、117 は円形をなす。大きさと形状からいずれも甑に伴うものと考えられる。

須恵器　118 は坏蓋。天井部から口縁部の破片。119 は坏身。口縁端部と底部を欠く小片である。120 は埦。坏部下半から高台部の破片。121 は提瓶。胴部上半の破片で、把手が退化した釦状の摘みが付く。122 は横瓶と考えられる。ヘラ記号状の沈線をもつ。123 は甕。口縁部から頸部の破片で、復元口径 21.0cm を測る。口縁端部は肥厚し、外面には縦方向にヘラ記号状の３条の沈線を施す。胴部外面にはカキメ、タタキを施し、内面に青海波文の当具痕を残す。

石器　198・199 は石庖丁。198 は３分の２程度の破片である。形状から直背外湾刃型と考えられ、紐を通す孔も２孔残っており、紐擦れによる削痕を確認できる。凝灰質細粒砂岩製。199 は小片だが背と刃部が残っており、形状から直背外湾刃型と考えられる。端部に紐を通す孔も確認できる。石材は凝灰質泥岩を用いる。

SD026（第５・26 図、図版 11・17）

グリッド 19 L で検出した。西から東方向に伸びており、さらに東側は段の削平で残っていない。検出できた範囲で、長さ 7.8m、最大幅 1.1m を測る。多くの礫に混じって弥生土器が出土した。

弥生土器　124 は甕。平底をなす底部片である。

SD027（第５・26 図、図版 17）

調査区の北側中央のグリッド 21 O から 22 O で検出した。南東から北西方向に伸びており、さらに北側はわずかに調査区外へと広がるようである。検出できた範囲で、長さ 7.2m、最大幅 1.2m を測る。出土遺物に須恵器がある。

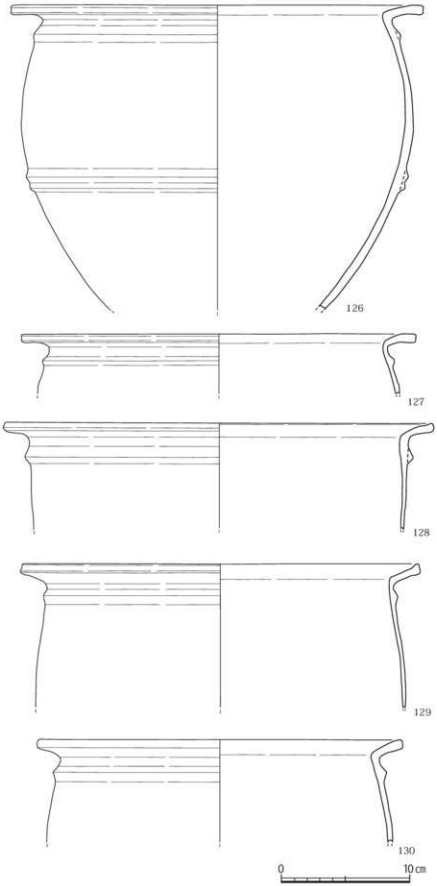
須恵器　125 は坏蓋。３分の１程度の破片である。復元口径 13.0、器高 3.3㎝。

SD028（第５・27 ～ 32・36 図、図版 11・17 ～ 20・22）

グリッド 23 M で検出した。SD025 を切る。北東から南西方向に伸びており、長さ 4.0m、幅 1.0m を測る。特筆すべきは、今回の調査区で最も遺物が集中して出土していることである。大量の弥生土器に加えて石斧、砥石が出土した。

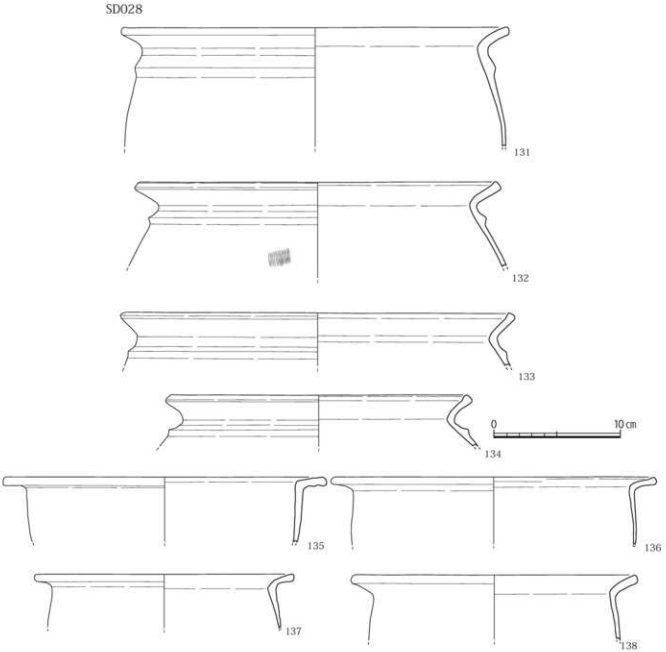
弥生土器　126 ～ 162 は甕。126 は口縁部から胴部下半の破片。鋤形口縁を呈し、口縁直下に三角突帯、胴部の中位にＭ字突帯を１条めぐらす。砲弾形を呈し、胴部の突帯のやや上位が最大径となる。復元口径 32.4cm。127 ～ 132 は口縁部から胴部上半の破片。127・128 は鋤形口縁、129・130 はそれをやや内傾させ、131・132 はくの字口縁となる。128・129 は端部内面を跳ね上げて仕上げる。いずれも口縁直下に三角突帯を１条めぐらす。復元口径は 127 は 30.8cm、128 は 34.0cm、129 は 31.0cm、130 は 28.9cm、131 は 31.0cm、132 は 28.6cm を測る。133・134 は口縁部から頸部の破片。いずれもくの字口縁で端部内面を跳ね上げて仕上げ、口縁直下に１条の三角突帯をめぐらす。133 は復元口径 30.8cm、134 は復元口径 24.0cm。135 ～ 145 は口縁部から頸部あるいは胴部上半にかけての破片。口縁直下に突帯をもたない型式である。口縁部は鋤形口縁、それをやや内傾させたもの、くの字になるものがあり、136 や 139 など端部内面を跳ね上げて仕上げるものもある。復元口径は 135 は 25.6cm、136

SD028



第 27 図　出土土器実測図 10（1/3）

は 25.6cm、137 は 20.6cm、138 は 22.6cm、139 は 28.8cm、140 は 24.0cm、141 は 25.9cm、142 は 27.0cm、143 は 27.0cm、144 は 28.4cm、145 は 30.0cm を測る。146 ～ 153 も口縁部片だが、いずれも小片のため反転復元できない。146・147 は鋤形口縁をやや内傾させたもの、148 ～ 153 はくの字口縁となる。146 ～ 151 は口縁直下に三角突帯を 1 条めぐらす。154 ～ 162 は底部片。162 に脚が付く以外は目立った特徴はなく、平底ないし若干上底の底部片である。163 は甕蓋。2 分の 1 程度を残し、裾部に向かって大きく広がる形状をとる。復元口径 32.5cm、器高 11.5cm。164 ～ 174 は壺。164 ～ 168 は広口壺。いずれも口縁部片で、164 は鋤形口縁となる。他は素口縁で 167 は肥厚する。大きく喇叭状に開く形状をとる。復元口径は 164 は 27.8cm、165 は 31.0cm、167 は 32.4cm、168 は 37.6cm を測る。169 は直口壺と考える口縁部片。端部は直角に折り返し肥厚させる。あまり類例をみない。170 は口縁端部と底部を欠く。胴部の形状が扁球形となる。小型品である。171 は類例をみない大型品。口縁部から胴部の破片である。口縁部は鋤形を呈し、頸部から肩

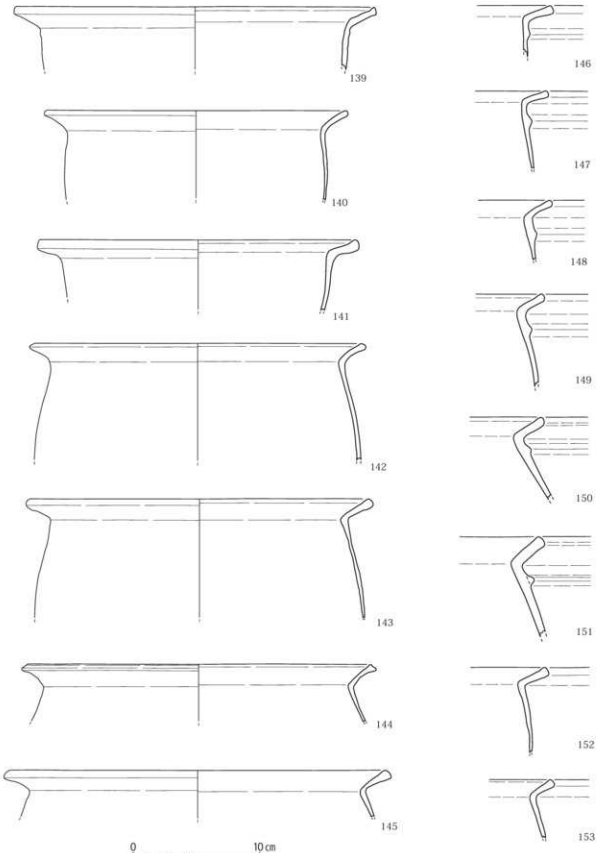


第 28 図　出土土器実測図 11（1/3）

部にかけて 7 条の三角突帯をめぐらす。復元口径 17.2cmを測る。172 ～ 174 は底部片。いずれも平底となる。175・176 は高坏。175 は 4 分の 3 程度遺存する。鋤形口縁をもち、長脚で裾部にかけて喇叭状に開く。復元口径 23.4cm、脚部径 15.2cm、器高 26.9cm。176 は口縁部から坏部の破片で、175 と同様に鋤形口縁を呈す。復元口径 22.8cm を測る。177 は鉢。3 分の 2 程度を残す小型品で、口径 9.5cm、底径 3.8cm、器高 5.3cm を測る。178 ～ 180 は器台。178 は 4 分の 3 程度を残す。脚部径 10.3cm、器高 18.25cm。179 はほぼ完形で口縁部を一部欠く。脚部径 10.5cm、器高 17.85cm。180 は 3 分の 2 程度を残すが、上縁部を欠く。脚部径 8.9cm で 178、179 に比べて細身である。

石器　200 は磨製石斧。いわゆる高槻型の太型蛤刃石斧である。完形品で重量感があるが、表面全体が風化する。安山岩質凝灰岩製。201 は砥石。2 面の砥面を残す破片である。目は細かい。石材は凝灰質泥岩を用いる。

SD028



第 29 図　出土土器実測図 12（1/3）

SD029（第5・32図、図版11・20）

調査区の西側中央のグリッド22Mから23Nで検出した。SI006を切り、SB016に切られている。東から西方向に伸びており、さらに西側は段の削平により遺存しない。検出できた範囲で長さ16.3mを測る。幅は東側の端部では先細りであるが、西側では約1.5m程を測る。弥生土器が出土した。

弥生土器　181は甕。鋤形を呈した口縁部片で、頸部に三角突帯を1条めぐらす。口径は46.8cmに復元でき、中型の甕に位置付けられる。遺構の切り合いから混入品であろう。

SD030（第5・32図、図版20）

グリッド24Mで検出した。南東から北西方向に伸びており、西側は土抗に切られている。検出できた範囲で、長さ3.5m、最大幅0.6m程を測る。弥生土器が出土した。

弥生土器　182は甕。やや上底気味の底部片である。

SD031（第15・32図、図版8・20）

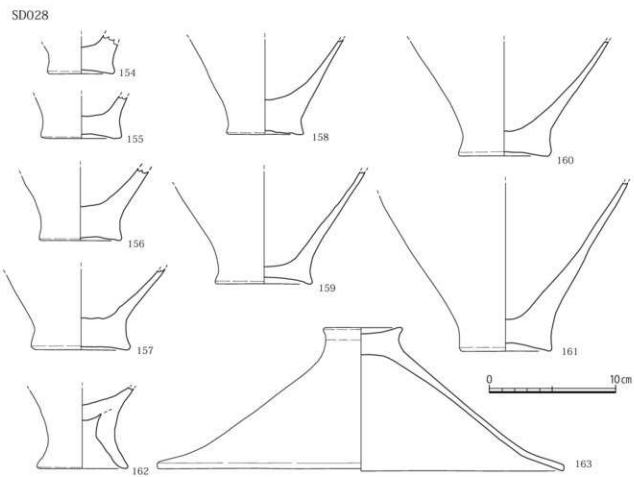
グリッド24Oで検出した。SI010の壁溝から南北方向に伸びる排水溝と考えられ、長さ1.7m、幅0.3mを測る。土師器が出土した。

土師器　183は高坏。坏底部から脚部上半の破片である。

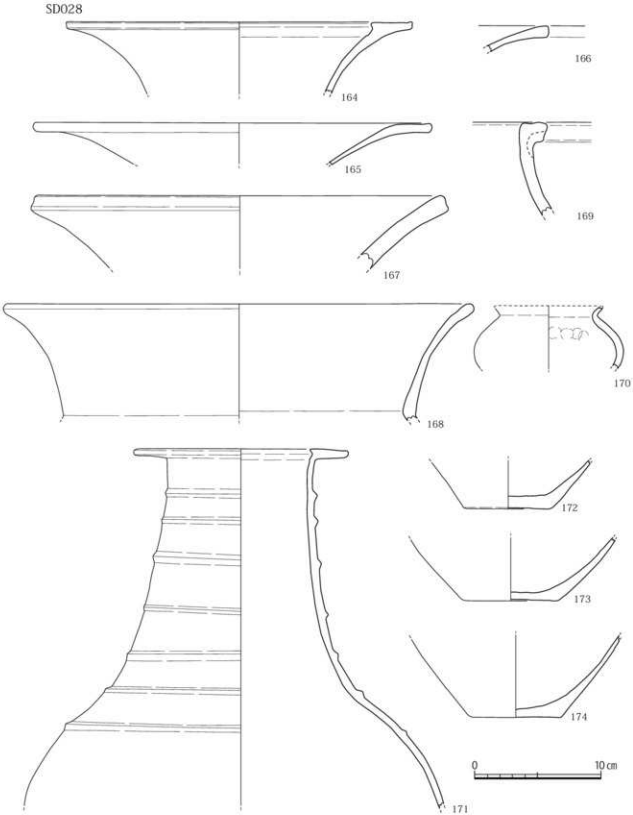
（5）柱穴（第5・36～38図、図版12・22）

調査区では多くの柱穴を検出した。柱穴出土の遺物のうち主要なものだけを以下に報告する。

石器　202は打製石鏃。ほぼ完形でわずかに先端部を欠く。凹基式。姫島産黒曜石製。SP032出土。

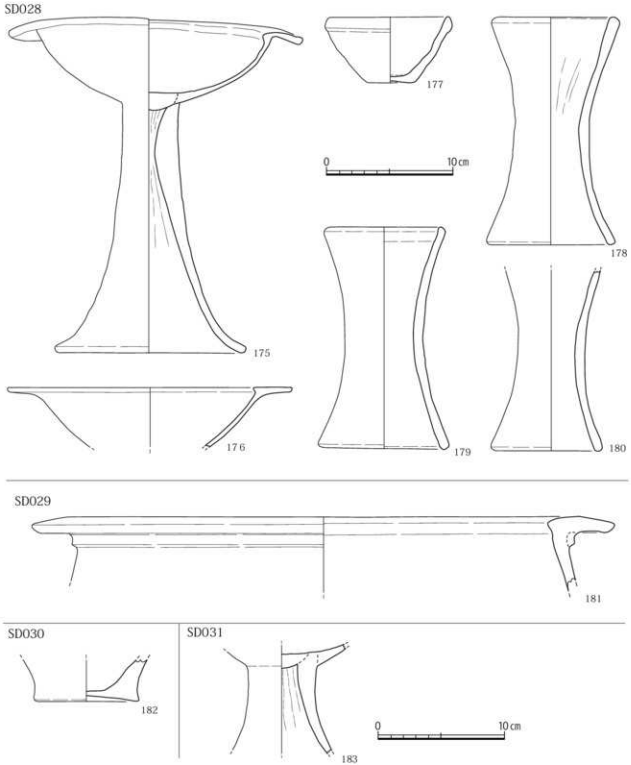


第30図　出土土器実測図13（1/3）



第 31 図　出土土器実測図 14（1/3）

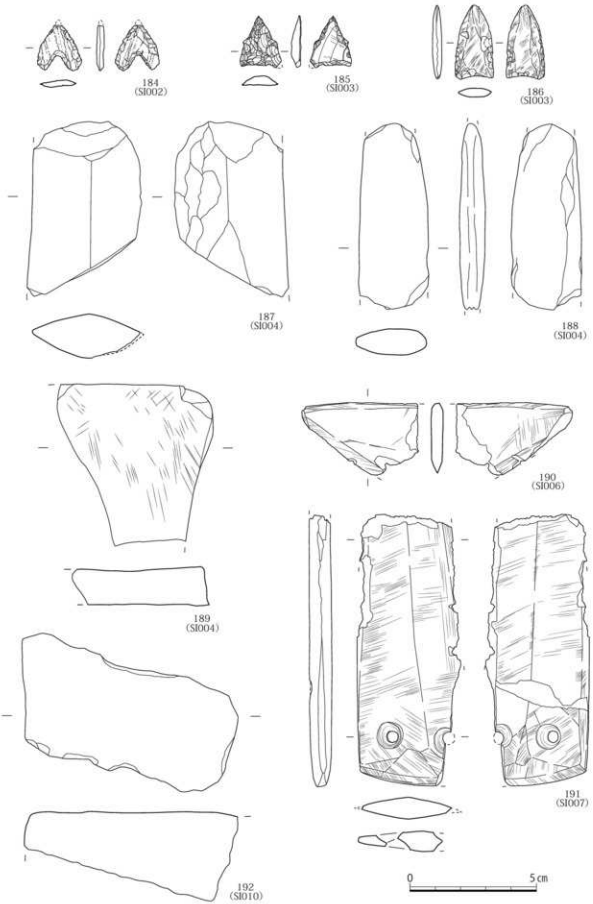
203 も打製石鏃。片脚を欠く。先端は尖ってはいるもののやや丸みを帯びる。凹基式。黒曜石製だが、石材の産地は明らかにできない。SP033 出土。204 も打製石鏃。先端をわずかに欠く。平基式。サヌカイト製。SP034 出土。205 は砥石。２面の砥面を残す破片である。目は細かく、石材は凝灰質細粒砂岩



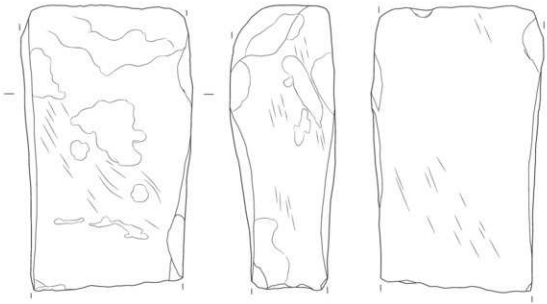
第 32 図　出土土器実測図 15（1/3）

を用いる。SP035 出土。206 も砥石。２面の砥面を残す小片である。砂質凝灰岩製。SP036 出土。207 は打製石鏃。凹基式で、先端と片脚をわずかに欠く。サヌカイト製。SP037 出土。

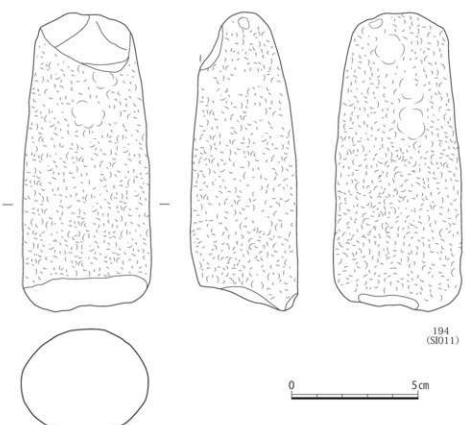
鉄器　212 は鉄鏃。鏃身部先端と茎部の大半を欠く。鏃身部は主頭形ないし方頭形で、断面形状より平造と判断できる。関部はナデ関となる。SP038 出土。213 も鉄鏃。柳葉形の鏃身部片で、断面は片丸造である。SP039 出土。



第 33 図　出土石器実測図 1（2/3）



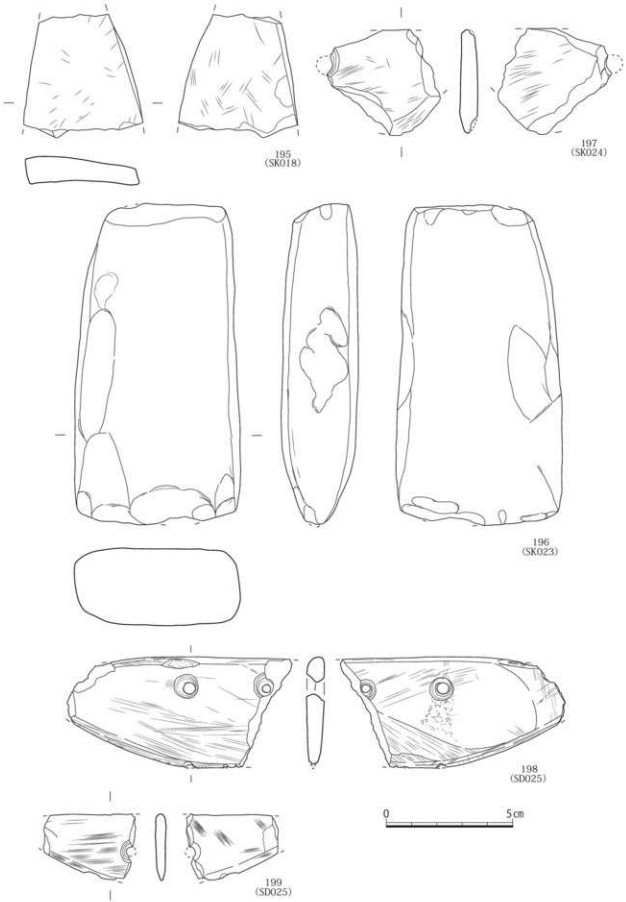
193
(SI010)



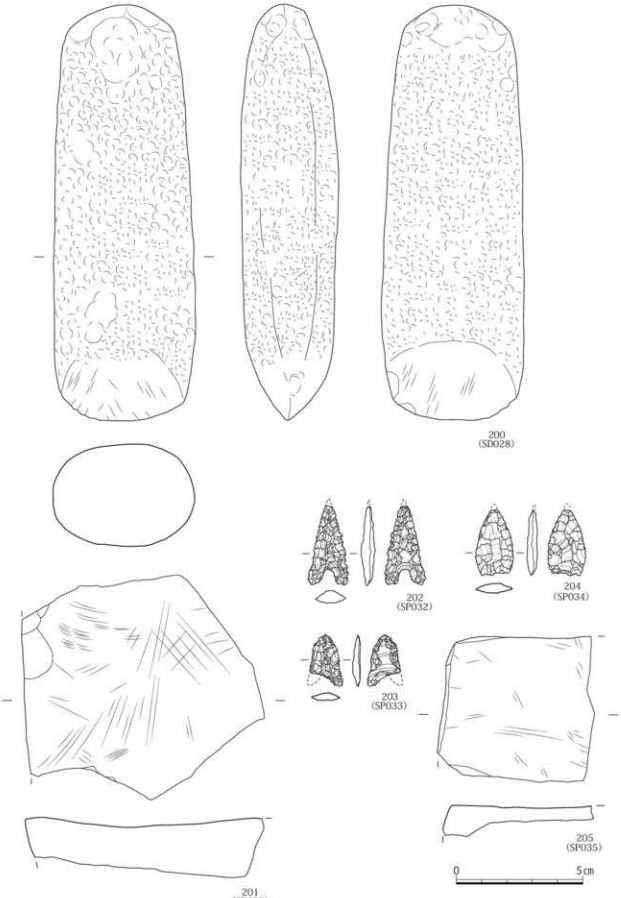
194
(SI011)

0　　5cm

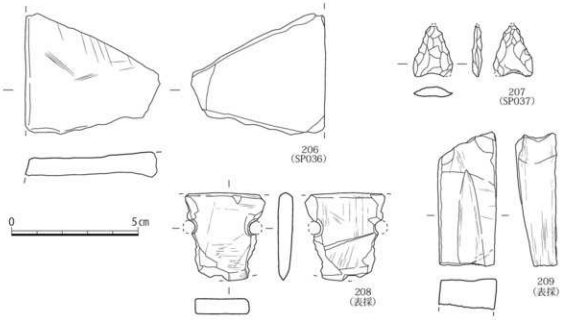
第 34 図　出土石器実測図2（2/3）



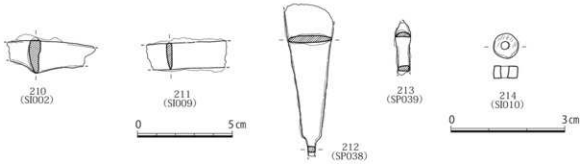
第 35 図　出土石器実測図3（2/3）



第 36 図　出土石器実測図 4（2/3）



第 37 図　出土石器実測図5（2/3）



第 38 図　出土鉄器・玉類実測図（1/2・1/1）

（6）採集遺物（第 37 図、図版 22）

表面採集遺物に弥生時代の石器がある。

石器　208 は石庖丁。中央の小片だが背と刃部も一部残り、端部に紐を通す孔も 2 孔確認できる。粘板岩製。209 は砥石。細長く 3 面の砥面を残す小片である。目は細かく、石材は細粒砂岩を用いる。

番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
1	S8001	須恵器	壺	残高5.1	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細～2mmの白色粒砂を含む	内:5GY6/ 外:5GY7/	胴部片	
2	S8002	上師器	壺	底径12.8/5.8 残高2.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2.5mmの白色粒砂を少量含む	内外:にぶい黄橙10YR 7/3	口縁部片	
3	S8002	須恵器	壺or甕	残高2.0	内:回転ナデ 外:回転ナデ→ハケメ?ナ・ケキメ	良好	微細な粒砂を含む	内:5GY.5Y 6/1 外:5GY.5Y 5/1	胴部片	
4	S8003	弥生土器	壺	復元底径6.2 残高2.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～4mmの白色細砂を含む	内:浅黄橙10YR 8/3 外:淡赤橙2.5YR 7/4,橙2.5YR 7/6	底部片	
5	S8003	弥生土器	壺	復元底径6.2 残高3.1	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3.5mmの白色細砂を少量含む	内:黄橙10YR 8/1 外:にぶい橙7.5YR 7/4	底部片	
6	S8003	弥生土器	壺or高杯	復元口径5.8 残高1.15	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの白色細砂を含む	内外:橙7.5YR 7/6	口縁部片	
7	S8003	弥生土器	壺	残高4.4	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒砂を含む	内:にぶい橙7.5YR 7/4 外:にぶい橙7.5YR 6/3	胴部片	
8	S8003	弥生土器	壺	復元底径6.9 残高3.3	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3.5mmの白色細砂を含む	内:黄橙10YR 5/1 外:灰白2.5Y 8/2	底部片	
9	S8003	弥生土器	壺	復元底径9.3 残高4.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの白色細砂を多く含む	内:にぶい橙7.5YR 6/4 外:橙2.5YR 6/6	底部片	
10	S8003	弥生土器	鉢	復元口径6.8 残高1.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒砂を含む	内外:にぶい橙7.5YR 5/3	口縁部片	
11	S8003	弥生土器	器台	残高3.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒砂を含む	内:橙7.5YR 7/6 外:橙5YR 7/6,橙2.5YR 7/6	口縁部片	
12	S8004	弥生土器	壺	底径6.8 残高4.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの白色細砂を多く含む	内:にぶい黄橙10YR 7/3 外:橙2.5YR 7/6	底部片	
13	S8004	弥生土器	器台	復元口径10.0 残高4.4	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの白色細砂を含む	内外:浅黄橙10YR 8/3,橙2.5YR 7/6	口縁部片	
14	S8005	上師器	高杯	脚部径8.5 残高3.5	内:ヨコナデ→しぼり 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粗砂を少量含む	内外:明赤褐2.5YR 5/8	坏部～脚部片	
15	S8005	上師器	高杯	残高3.15	内:ヨコナデ→しぼり 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粗砂を少量含む	内外:にぶい黄橙10YR 7/4	坏部～脚部片	
16	S8005	上師器	鉢	復元口径10.85 残高6.65	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→ヘラケズリ	良好	微細～2mmの粗砂を少量含む	内外:明赤褐2.5YR 5/6	口縁部～胴部片	
17	S8005	上師器	壺	口径10.45 器高12.95	内:ヨコナデ→ヘラケズリ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒砂を多く含む	内外:明赤褐2.5YR 5/8	口縁部～底部一部欠損	
18	S8005	上師器	壺	口径14.1 器高13.05	内:ヨコナデ→ヘラケズリ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粗砂を多く含む	内:明黄褐10YR 6/6,灰黄褐10YR 4/2 外:赤褐5.5YR,明黄褐5YR 6/6	口縁～胴部片	口径推定
19	S8005	上師器	甕	復元口径30.8 残高13.75	内:ヨコナデ→ヘラケズリ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒砂を含む	内外:橙7.5YR 6/6	口縁部～胴部片	
20	S8005	弥生土器	壺	復元胴部径13.4 器高20.9	内:ヨコナデ→ケズリ?・しぼり 外:ヨコナデ→ナデ	良好	微細～2mmの粗砂を少量含む	内外:にぶい黄橙10YR 7/4,明赤褐2.5YR 5/6	胴部～底欠損	
21	S8005	須恵器	坏蓋	復元口径14.4 器高5.6	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～2mmの白色粒砂を少量含む	内:黄橙10YR 6/1 外:5GY 6/1,黒N 2/1	2/3程度	
22	S8006	上師器	高坏	復元胴部径11.9 残高5.5	内:ヨコナデ→しぼり 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの白色細砂を含む	内外:明赤褐2.5YR 5/8	脚部片	
23	S8006	上師器	鉢	残高7.6	内:ナデ 外:ナデ→オサエ	良好	微細～3mmの白色細砂を含む	内外:浅黄橙10YR 8/4	把手片	
24	S8006	上師器	壺	残高3.0	内:ナデ 外:ナデ→オサエ	良好	微細～3mmの白色・黒色粒砂を含む	内外:明赤褐5YR 5/8	把手片	
25	S8006	須恵器	坏身	復元口径12.4 器高5.85	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～2mmの白色・黒色粒砂を含む	内:5GY 6/1 外:5GY.5Y 6/1	1/4程度	
26	S8006	須恵器	坏身	残高1.5	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～3mmの白色細砂を含む	内外:青灰10BG 5/1	底部片	
27	S8007	弥生土器	壺	復元底径6.2 残高3.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒砂を多く含む	内:にぶい黄橙10YR 7/3 外:橙2.5YR 6/6	底部片	
28	S8007	弥生土器	壺	復元底径7.8 残高2.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～4mmの白色細砂を多く含む	内:にぶい黄橙10YR 6/4 外:赤橙10R 6/8	底部片	
29	S8007	弥生土器	壺	復元底径6.0 残高4.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒砂を多く含む	内:橙7.5YR 6/6 外:橙7.5YR 7/6	底部片	
30	S8007	弥生土器	壺	復元底径9.2 残高3.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色細砂を多く含む	内:灰白2.5Y 8/2 外:灰白2.5Y 8/2,橙2.5YR 6/8	底部片	
31	S8007	上師器	高坏	復元口径17.0 残高3.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの粗砂を少量含む	内外:橙5YR 6/8	坏部片	
32	S8007	上師器	高坏	残高5.55	内:ヨコナデ→オサエ 外:ヨコナデ→ヘラケズリ・オサエ	良好	微細～3mmの細砂を少量含む	内外:橙7.5YR 7/6	坏部～脚部片	
33	S8007	上師器	高坏	残高2.3	内:ヨコナデ→ケズリ 外:ヨコナデ→オサエ	良好	微細～3mmの粗砂を少量含む	内外:明赤褐2.5YR 5/6	坏部～脚部片	
34	S8007	上師器	甕or鉢	残高2.1	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→ヘラケズリ	良好	微細～3mmの細砂を少量含む	内:明赤褐2.5YR 5/8 外:橙2.5YR 6/8	底部片	
35	S8007	上師器	壺	復元口径15.6 器高10.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	不良	微細～2mmの粗砂を多く含む	内:にぶい黄橙10YR 6/3 外:赤橙10R 6/6,灰褐7.5YR 4/2	1/4程度	
36	S8007	上師器	鉢	残高10.6	内:ナデ 外:ナデ・オサエ	良好	微細～2mmの粗砂を少量含む	内外:橙7.5YR 7/6	把手片	
37	S8007	上師器	鉢	残高5.8	内:ナデ 外:ナデ・オサエ	良好	微細～2mmの白色粒砂を少量含む	内外:にぶい橙7.5YR 7/4	把手片	
38	S8007	上師器	鉢	残高3.1	内:ナデ 外:ナデ・オサエ	良好	微細～2mmの粗砂を少量含む	内外:橙5YR 6/6	把手片	
39	S8007	上師器	鉢	残高3.35	内:ナデ 外:ナデ・オサエ	良好	微細～1mmの白色粒砂を含む	内外:明赤褐5YR 4/8	把手片	
40	S8007	須恵器	坏蓋	復元口径13.0 残高3.8	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	ややよく良	緻密	内外:5G 3/10Y 7/1	口縁部片	

表１　出土遺物観察表１

番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
41	S0007	須恵器	坏蓋	復元口径15.9 器高3.7	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～3mmの砂礫を少量含む	内:5C12.5Y 7/1 外:にぶい黄橙10YR 7/2,黒2.5Y 2/1	天井部～口縁部片	
42	S0007	須恵器	坏身	復元口径11.4 器高4.4	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～2mmの白色粒砂を含む	内:にぶい黄橙10YR 6/3 外:灰黄褐10YR 6/2,黒5C10YR 5/1	1/2程度	
43	S0007	須恵器	坏身	復元口径12.0 器高3.55	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～2mmの白色粒砂を少量含む	内外:5GN6/	1/4程度	
44	S0007	須恵器	坏身	復元口径11.9 残高4.5	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	精良	内:5C12.5Y 7/1 外:黄灰2.5Y 6/1	口縁部～底部片	
45	S0007	須恵器	坏身	口径12.0 器高4.0	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～2.5mmの白色・黒色細礫を多く含む	内:にぶい橙7.5YR 6/4 外:灰黄2.5Y 7/2	口径完形	歪みが著しい
46	S0007	須恵器	坏身	残高3.8	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～3mmの白色細礫を含む	内:5GN6/ 外:5GN 5/	口縁部欠損	
47	S0007	須恵器	坏身	復元口径13.1 残高3.4	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～1mmの白色粒砂を少量含む	内:灰黄褐10YR 6/2 外:灰黄2.5Y 7/2	口縁部片	
48	S0007	須恵器	坏身	復元口径14.2 残高4.0	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～1mmの白色粒砂を含む	内:灰黄褐10YR 6/2 外:オリーブ灰2.5GY 6/1	1/2程度	
49	S0007	須恵器	坏身	復元口径14.2 残高4.0	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～2mmの白色粒砂を少量含む	内外:5GN6/	口縁部～底部片	
50	S0007	須恵器	壺	復元口径9.1 器高9.1	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～2mmの白色細礫を含む	内外:5GN6/	1/3程度	
51	S0007	須恵器	甕	残高5.25	内:回転ナデ→(当具痕) 外:回転ナデ→カキメ→タタキ	良好	微細～1mmの白色粒砂を少量含む	内外:緑灰10G 5/1	胴部片	
52	S0008	土師器	甕	復元口径15.8 残高13.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～3mmの白色細礫を多く含む	内外:明赤褐2.5YR 5/6	口縁部～胴部片	
53	S0009	土師器	高坏	復元口径15.4 残高4.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの白色細礫を多く含む	内:橙7.5YR 7/6 外:橙5YR 7/6,橙7.5YR 7/6	坏部片	
54	S0009	土師器	甕	残高6.2	内:ヨコナデ→ヘラケズリ 外:ヨコナデ	不良	微細～5.5mmの白色中礫を多く含む	内:明橙7.5YR 5/6,にぶい橙7.5YR 6/4 外:明赤褐2.5YR 5/6	口縁部～胴部片	
55	S0009	土師器	壺or甕	残高3.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色中礫を含む	内:浅黄橙10YR 8/4,灰黄褐10YR 4/2 外:赤10R 5/8	底部片	
56	S0009	土師器	埦	残高4.5	内:ナデ 外:ナデ・オサエ	良好	微細～2mmの白色粒砂を含む	内外:橙5YR 6/8	把手片	
57	S0009	須恵器	埦	残高3.4	内:ナデ 外:ナデ・オサエ	良好	微細な白色粒砂を含む	内外:青灰10BG 5/1	把手片	
58	SD10	土師器	高坏	復元口径16.0 残高5.3	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粒砂を少量含む	内:橙5YR 7/6 外:橙5YR 7/6,浅黄橙10YR 8/4	坏部片	
59	SD10	土師器	甕	復元口径13.4 残高6.1	内:ヨコナデ→ヘラケズリ 外:ヨコナデ→ナデメ→ケ	良好	微細～1mmの白色粒砂を含む	内:浅黄橙7.5YR 8/4,橙5YR 7/6 外:橙5YR 7/6,にぶい橙7.5YR 6/4	口縁部～胴部片	
60	SD10	土師器	甕	復元口径12.0 残高8.4	内:ヨコナデ→ヘラケズリ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～4mmの白色細礫を多く含む	内:にぶい黄橙10YR 7/3,灰黄褐10YR 5/2 外:黄灰2.5Y 5/1,にぶい橙7.5YR 6/4	口縁部～胴部片	
61	SD10	土師器	甕	復元口径11.4 残高3.0	内:ヨコナデ→ケズリ 外:ヨコナデ	良好	微細～4.5mmの細礫を多く含む	内外:にぶい黄橙10YR 7/4	口縁部片	
62	SD10	土師器	甕	復元口径14.1 残高4.15	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒砂を含む	内:にぶい橙7.5YR 6/4 外:橙5YR 6/6	口縁部片	
63	SD10	土師器	甕	復元口径21.8 残高3.05	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの細礫を多く含む	内外:にぶい黄橙10YR 7/4	口縁部片	
64	SD10	土師器	甕	復元口径22.2 残高16.6	内:ヨコナデ→ヘラケズリ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの白色細礫を多く含む	内外:橙2.5YR 6/8	口縁部～胴部片	
65	SD10	土師器	甕	残高6.0	内:ナデ 外:ナデ・オサエ	良好	精良	内外:橙5YR 7/6,浅黄橙7.5YR 8/4	把手片	
66	SD10	土師器	甕	残高5.0	内:ナデ 外:ナデ・オサエ	良好	微細～2mmの白色粒砂を含む	内外:橙7.5YR 7/6	把手片	
67	SD10	須恵器	坏蓋	復元口径14.8 残高2.3	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～1mmの白色粒砂を含む	内外:5C10Y 6/1	口縁部片	
68	SD10	須恵器	坏身	復元口径12.0 器高3.6	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～6mmの白色中礫を多く含む	内外:5GN 5/	1/2程度	
69	SD10	須恵器	坏身	復元口径12.4 残高3.2	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細～2mmの白色粒砂を少量含む	内:5C10Y 6/1 外:灰黄2.5Y 6/2	口縁部片	
70	SD10	須恵器	坏身	残高2.9	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細～1mmの白色・黒色粒砂を多く含む	内外:5GN6/	口縁部片	
71	SD10	須恵器	壺	復元口径10.0 残高5.95	内:回転ナデ 外:回転ナデ	良好	微細～2mmの白色粒砂を少量含む	内:5C GN 7/ 外:5C GN7/,5C10BY 5/3	口縁部～胴部片	
72	SD10	須恵器	甕	残高4.1	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～1mmの白色粒砂を含む	内:5C GN 7/ 外:5G7,5Y 6/1	底部片	
73	SD11	土師器	鉢	復元口径12.8 残高5.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの細礫を多く含む	内:橙2.5YR 7/8 外:橙2.5YR 6/6,にぶい黄橙10YR 7/4	口縁部～胴欠損	
74	SD11	土師器	甕	残高23.5	内:ヨコナデ→ヨコハケ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～2mmの白色粒砂を少量含む	内:明浅黄10YR 8/3 外:にぶい黄橙10YR 7/2,浅黄橙10YR 8/4	胴部～底部片	
75	SD11	須恵器	坏蓋	口径13.8 器高3.7	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～1mmの白色粒砂を少量含む	内:5C GN7/ 外:5GN6/,5GN 5/	口径完形	
76	SD11	須恵器	坏蓋	復元口径14.0 器高3.9	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～3mmの白色細礫を少量含む	内:5C GN7/ 外:5C GN7/,5GN6/	完形	
77	SD018	弥生土器	壺	復元口径23.0 残高9.0	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～1mmの白色粒砂を多く含む	内:浅黄橙10YR 8/4 外:にぶい黄橙10YR 7/4	口縁部～胴部片	
78	SD018	弥生土器	壺	復元口径19.0 残高4.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒砂を含む	内外:浅黄橙10YR 8/3	口縁部片	
79	SD018	弥生土器	壺	復元口径32.0 残高8.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒砂を多く含む	内:浅黄橙7.5YR 8/4,黒5C10YR 6/1 外:橙7.5YR 7/6	口縁部片	
80	SD018	弥生土器	壺	残高3.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色細礫を含む	内外:浅黄橙10YR 8/4	口縁部片	

表２　出土遺物観察表２

番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)	調整	焼成	粘土	色調	残存	備考
81	SB018	弥生土器	壺	底径6.2 残高4.4	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの礫雲を多く含む	内:明2.5YR 7/6,浅黄橙10YR 8/4 外:にぶい橙5YR 6/4,明7.5YR 7/6	底部片	
82	SB018	弥生土器	壺	底径6.6 残高4.0	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒子を多く含む	内:明6/7.5YR 5/1 外:赤橙10R 6/6	底部片	
83	SB018	弥生土器	壺	復元底径5.7 残高3.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～2.5mmの礫雲を含む	内:橙7.5YR 7/6 外:橙2.5YR 7/6,橙7.5YR 7/6	底部片	
84	SB018	弥生土器	壺	底径6.4 残高7.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～5mmの白色礫雲を多く含む	内:にぶい黄橙10YR 7/4 外:赤橙10R 6/6	底部片	
85	SB018	弥生土器	壺	復元口径27.9 残高3.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒子を多く含む	内外:にぶい橙7.5YR 7/4	口縁部片	
86	SB018	弥生土器	壺	残高3.4	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒子を多く含む	内:浅黄橙7.5YR 8/6 外:橙7.5YR 7/6	口縁部片	
87	SB018	弥生土器	壺	復元底径7.3 残高2.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒子を多く含む	内:浅黄橙10YR 8/4 外:浅黄橙10YR 8/4,黒褐10YR 3/1	底部片	
88	SB018	弥生土器	高杯	復元口径26.2 残高5.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～5mmの白色礫雲を多く含む	内外:橙5YR 6/8	口縁部片	
89	SB018	弥生土器	高杯	復元口径26.6 残高1.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒子を多く含む	内:浅黄橙10YR 8/3 外:浅黄橙10YR 8/4	口縁部片	
90	SB019	弥生土器	壺	残高13.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～5mmの粒子を含む	内:灰白10YR 8/2,明黄褐10YR 7/6 外:浅黄橙10YR 8/3,明黄褐10YR 7/6	口縁部～胴部片	
91	SB019	弥生土器	壺	底径6.8 残高1.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粒子を多く含む	内外:橙2.5YR 7/6,浅黄橙10YR 8/3	底部片	
92	SB019	弥生土器	壺	復元口径27.6 残高6.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粒子を多く含む	内:橙7.5YR 7/6,浅黄橙10YR 8/4 外:橙2.5YR 6/6,浅黄橙10YR 8/4	口縁部～頸部片	
93	SB019	弥生土器	壺	残高8.4	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの礫雲を多く含む	内:橙2.5YR 6/8,橙7.5YR 7/6 外:浅黄橙7.5YR 8/4,浅黄橙10YR 8/4	口縁部～頸部片	
94	SB019	弥生土器	壺	残高13.4	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2.5mmの礫雲を多く含む	内外:にぶい橙7.5YR 7/4,橙7.5YR 7/6	頸部片	
95	SB019	弥生土器	壺	残高11.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粒子を多く含む	内外:橙7.5YR 7/6,にぶい黄橙10YR 7/3	頸部片	
96	SB019	弥生土器	高杯	残高11.7	内:ヨコナデ→しぼり 外:ヨコナデ	やや不良	微細～5mmの中礫を多く含む	内外:浅黄橙10YR 8/4	脚部片	
97	SB020	弥生土器	壺	復元底径6.6 残高5.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～5mmの礫雲を多く含む	内外:橙7.5YR 7/6	底部片	
98	SB020	弥生土器	高杯	残高2.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～1.5mmの粒子を多く含む	内外:浅黄橙10YR 8/4	口縁部片	
99	SB020	弥生土器	器台	復元脚部径11.2 残高6.0	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～2mmの礫雲を多く含む	内外:橙2.5YR 6/6,橙5YR 7/6	脚部片	
100	SB021	弥生土器	壺	復元口径33.0 残高1.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒子を含む	内外:橙7.5YR 7/6	口縁部片	
101	SB021	弥生土器	壺	復元底径7.3 残高2.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒子を含む	内:にぶい橙7.5YR 7/4 外:橙7.5YR 7/6	底部片	
102	SB022	弥生土器	壺	底径6.2 残高3.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～2mmの礫雲を多く含む	内:黄灰2.5Y 5/1 外:にぶい橙5YR 6/4	底部片	
103	SB022	上師器	高杯	復元口径15.0 残高3.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～6mmの中礫を含む	内:橙2.5YR 6/6 外:明赤褐2.5YR 5/6	口縁部片	
104	SB022	上師器	高杯	復元口径14.4 残高4.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～2mmの粒子を含む	内外:橙2.5YR 6/8	坏部片	
105	SB022	上師器	高杯	残高4.0	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～2mmの礫雲を多く含む	内:橙2.5YR 6/8 外:橙5YR 6/8,黄灰10YR 4/1	坏部～脚部片	
106	SD025	弥生土器	壺	復元底径6.6 残高3.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの礫雲を多く含む	内外:にぶい橙7.5YR 6/4	底部片	
107	SD025	弥生土器	壺	復元底径7.8 残高3.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒子を多く含む	内外:橙5YR 7/6	底部片	
108	SD025	弥生土器	壺	底径7.6 残高4.4	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色礫雲を多く含む	内:にぶい黄橙10YR 7/4 外:にぶい黄橙10YR 7/4,橙2.5YR 7/6	底部片	
109	SD025	弥生土器	壺	復元底径5.8 残高3.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～2mmの白色礫雲を多く含む	内外:にぶい黄橙10YR 7/4	底部片	
110	SD025	弥生土器	壺	残高2.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～5mmの白色粒子を少量含む	内:浅黄橙7.5YR 8/6 外:橙5YR 7/6	口縁部片	円形付文
111	SD025	弥生土器	壺	残高4.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→タタハケ	良好	微細～2mmの白色粒子を含む	内:橙7.5YR 6/6 外:橙7.5YR 7/6	口縁部片	
112	SD025	上師器	壺	底径12.5 残高5.15	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～2mmの粒子を少量含む	内外:にぶい黄橙10YR 7/4	底部片	
113	SD025	上師器	高杯	残高2.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→ミガキ	良好	微細～2mmの粒子を少量含む	内外:橙7.5YR 6/6	坏部～脚部片	
114	SD025	上師器	高杯	残高2.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粒子を少量含む	内外:にぶい黄橙10YR 6/4,橙2.5YR 6/6	坏部～脚部片	
115	SD025	上師器	甑	残高9.1	内:ナデ 外:ナデ→ミガキ	良好	微細～2mmの粒子を少量含む	内外:橙7.5YR 7/6	把手片	
116	SD025	上師器	甑	残高6.1	内:ナデ 外:ナデ→ミガキ	良好	微細～2mmの粒子を少量含む	内外:明黄橙10YR 6/6	把手片	
117	SD025	上師器	甑	残高6.2	内:ナデ 外:ナデ→ミガキ	良好	微細～5mmの白色礫雲を少量含む	内外:橙5YR 6/6	把手片	
118	SD025	須恵器	坏蓋	残高2.2	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～2mmの粒子を少量含む	内:灰白2.5Y 7/1 外:黄灰2.5Y 6/1	天井部～口縁部片	
119	SD025	須恵器	坏身	残高2.85	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～2mmの白色粒子を少量含む	内外:灰7.5Y 6/1	坏部片	
120	SD025	須恵器	壺	復元底径9.6 残高2.4	内:回転ナデ 外:回転ナデ→ヘラケズリ	良好	微細～2mmの白色礫雲を少量含む	内外:5GY 6/1	坏部～底部片	

表3　出土遺物観察表3

番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
121	SD025	須恵器	提瓶	残高4.75	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ→カキメ	良好	微細～1mmの白色・黒色粒子を少量含む	内外:黄灰2.5Y 6/1	胴部片	自然釉
122	SD025	須恵器	横瓶？	残高9.3	内:回転ナデ 外:回転ナデ→カキメ	良好	微細～1mmの白色粒子を少量含む	内外:5GN6/	胴部片	
123	SD025	須恵器	壺	復元口径21.0 残高7.8	内:回転ナデ(当具痕) 外:回転ナデ→タタキ→カキメ	良好	微細～2mmの粒子を少量含む	内外:5GGN7/,5GN6/	口縁部～胴部片	
124	SD026	弥生土器	壺	底径8.4 残高3.4	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3.5mmの白色細礫を多く含む	内:にぶい黄橙10YR 7/4 外:橙2.5YR 7/6	底部片	
125	SD027	須恵器	坏蓋	復元口径13.0 器高3.3	内:回転ナデ 外:回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	微細～1mmの白色粒子を含む	内:灰白10Y 7/1 外:5GGY5/1 7/1	1/3程度	
126	SD028	弥生土器	壺	復元口径31.4 残高21.0	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粒子を多く含む	内外:明黄褐10YR 6/6,黒褐10YR 3/1	口縁部～胴部片	
127	SD028	弥生土器	壺	復元口径30.8 残高4.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒子を含む	内外:浅黄橙10YR 8/4	口縁部片	
128	SD028	弥生土器	壺	復元口径31.0 残高6.3	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粒子を少量含む	内:橙7.5YR 6/6 外:にぶい橙7.5YR 5/4	口縁部～胴部片	
129	SD028	弥生土器	壺	復元口径31.0 残高11.3	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの白色細礫を含む	内外:橙10YR 6/6	口縁部～胴部片	
130	SD028	弥生土器	壺	復元口径28.9 残高8.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粒子を含む	内外:橙10YR 6/6	口縁部～胴部片	
131	SD028	弥生土器	壺	復元口径31.0 残高6.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～2.5mmの礫礫を多く含む	内:橙7.5YR 7/6 外:にぶい橙7.5YR 6/4	口縁部～胴部片	
132	SD028	弥生土器	壺	復元口径26.6 残高6.2	内:ヨコナデ→タテハケ 外:ヨコナデ→タテハケ	良好	微細～2mmの粒子を多く含む	内:橙7.5YR 6/6 外:にぶい橙7.5YR 5/3	口縁部～胴部片	
133	SD028	弥生土器	壺	復元口径30.8 残高4.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～1.5mmの粒子を多く含む	内:にぶい橙7.5YR 6/4,明黄褐10YR 7/6 外:橙7.5YR 6/6	口縁部片	
134	SD028	弥生土器	壺	復元口径31.0 残高4.1	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの礫礫を多く含む	内外:浅黄橙10YR 8/4 外:橙7.5YR 7/6	口縁部片	
135	SD028	弥生土器	壺	復元口径25.6 残高5.35	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色礫礫を多く含む	内外:橙10YR 6/6	口縁部～胴部片	
136	SD028	弥生土器	壺	復元口径25.6 残高5.4	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色礫礫を多く含む	内:橙7.5YR 7/6 外:橙10YR 7/6	口縁部～胴部片	
137	SD028	弥生土器	壺	復元口径20.6 残高4.3	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒子を含む	内:黄灰2.5Y 6/1,浅黄橙7.5YR 8/3 外:浅黄橙7.5YR 8/4	口縁部～胴部片	
138	SD028	弥生土器	壺	復元口径22.6 残高5.35	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒子を含む	内:にぶい橙7.5YR 5/3 外:にぶい橙7.5YR 6/3,橙2.5YR 7/6	口縁部～胴部片	
139	SD028	弥生土器	壺	復元口径28.8 残高5.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒子を多く含む	内外:橙10YR 6/6	口縁部～胴部片	
140	SD028	弥生土器	壺	復元口径31.0 残高7.15	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～1mmの白色礫礫を多く含む	内外:橙7.5YR 6/6	口縁部～胴部片	
141	SD028	弥生土器	壺	口径25.9 残高5.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粒子を多く含む	内外:橙7.5YR 6/6	口縁部～胴部片	
142	SD028	弥生土器	壺	復元口径37.6 残高9.4	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粒子を多く含む	内外:黄橙10YR 8/8,灰黄褐10YR 4/2	口縁部～胴部片	
143	SD028	弥生土器	壺	復元口径37.8 残高9.55	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒子を含む	内:橙10YR 6/8 外:にぶい橙7.5YR 5/4	口縁部～胴部片	
144	SD028	弥生土器	壺	復元口径28.4 残高4.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの白色礫礫を含む	内外:浅黄橙7.5YR 8/4	口縁部片	
145	SD028	弥生土器	壺	復元口径30.0 残高3.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2.5mmの白色礫礫を多く含む	内:にぶい橙7.5YR 7/4 外:にぶい橙7.5YR 6/3	口縁部片	
146	SD028	弥生土器	壺	残高4.1	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒子を含む	内外:橙7.5YR 7/6	口縁部片	
147	SD028	弥生土器	壺	残高6.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒子を多く含む	内:橙7.5YR 7/6 外:橙5YR 6/6	口縁部～胴部片	
148	SD028	弥生土器	壺	残高4.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～4mmの白色礫礫を含む	内外:橙10YR 6/6	口縁部片	
149	SD028	弥生土器	壺	残高7.3	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの礫礫を多く含む	内:にぶい橙7.5YR 7/4 外:橙10YR 6/6	口縁部～胴部片	
150	SD028	弥生土器	壺	残高6.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粒子を多く含む	内:にぶい黄橙10YR 7/4,灰黄褐10YR 5/2 外:にぶい黄橙10YR 7/4,黒褐5YR 5/1	口縁部～胴部片	
151	SD028	弥生土器	壺	残高8.0	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～1.5mmの粒子を多く含む	内:浅黄橙10YR 8/4 外:灰黄褐10YR 5/2	口縁部～胴部片	
152	SD028	弥生土器	壺	残高6.85	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粒子を含む	内:にぶい橙7.5YR 6/4 外:にぶい橙7.5YR 5/3	口縁部～胴部片	
153	SD028	弥生土器	壺	残高4.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色礫礫を多く含む	内:灰白10YR 8/2 外:にぶい橙7.5YR 5/4	口縁部片	
154	SD028	弥生土器	壺	底径5.4 残高3.1	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	やや不良	微細～2mmの粒子を少量含む	内:橙7.5YR 7/6 外:にぶい黄橙10YR 7/4	底部片	
155	SD028	弥生土器	壺	底径6.4 残高5.4	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの礫礫を多く含む	内:にぶい黄橙10YR 7/4 外:橙2.5YR 6/6,にぶい黄橙10YR 7/4	底部片	
156	SD028	弥生土器	壺	底径6.6 残高5.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粒子を多く含む	内:橙7.5YR 7/6 外:橙2.5YR 6/6	底部片	
157	SD028	弥生土器	壺	底径8.0 残高6.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～3mmの礫礫を多く含む	内:明赤褐5YR 5/6,橙2.5YR 6/6 外:明赤褐2.5YR 5/6,橙2.5YR 6/6	底部片	
158	SD028	弥生土器	壺	底径6.2 残高7.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～4mmの礫礫を多く含む	内:にぶい橙7.5YR 6/4 外:橙2.5YR 6/8	底部片	
159	SD028	弥生土器	壺	底径7.8 残高9.0	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～4mmの礫礫を多く含む	内:にぶい黄橙10YR 7/4 外:橙2.5YR 6/6,にぶい橙5YR 6/4	胴部～底部片	
160	SD028	弥生土器	壺	底径7.4 残高9.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2.5mmの礫礫を多く含む	内:にぶい橙7.5YR 5/3 外:橙2.5YR 6/6	胴部～底部片	

表4　出土遺物観察表4

番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)	調整	焼成	粘土	色調	残存	備考
161	SD028	弥生土器	壺	底径7.4 残高13.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの礫混ざる 含む	内:にぶい黄橙10YR 7/3 外:にぶい橙7.5YR 6/4	胴部～底部片	
162	SD028	弥生土器	壺	底径7.25 残高6.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色礫混ざる多く含む	内:橙5YR 7/6 外:赤橙10YR 6/8	底部片	
163	SD028	弥生土器	壺	復元口径12.5 器高11.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粗砂を多く含む	内:浅黄橙7.5YR 8/4,にぶい橙7.5YR 6/4 外:橙7.5YR 6/8	1/2程度	
164	SD028	弥生土器	壺	復元口径27.8 残高5.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粗砂を多く含む	内:にぶい橙7.5YR 7/4 外:にぶい橙7.5YR 6/4	口縁部片	
165	SD028	弥生土器	壺	復元口径31.0 残高3.3	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粗砂を多く含む	内:にぶい橙7.5YR 6/4,黒灰7.5YR 4/1 外:浅黄橙10YR 8/3,黒褐10YR 3/1	口縁部片	
166	SD028	弥生土器	壺	残高2.1	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粗砂を少量含む	内:にぶい黄橙10YR 5/3 外:明黄褐10YR 6/6	口縁部片	
167	SD028	弥生土器	壺	復元口径32.4 残高5.85	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粗砂を多く含む	内外:明黄褐10YR 6/6	口縁部片	
168	SD028	弥生土器	壺	復元口径37.6 残高8.4	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粗砂を多く含む	内:橙7.5YR 6/6,にぶい橙7.5YR 5/4 外:橙5YR 6/8	口縁部～頸部片	
169	SD028	弥生土器	壺	残高7.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粗砂を多く含む	内:浅黄橙10YR 8/4 外:明黄褐10YR 7/6	口縁部片	
170	SD028	弥生土器	壺	残高4.95	内:ヨコナデ→ナナメ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粗砂を多く含む	内:灰黄褐10YR 6/2 外:にぶい黄橙10YR 7/4	口縁部～頸部片	
171	SD028	弥生土器	壺	復元口径17.2 残高26.7	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの礫混ざる多く含む	内:橙7.5YR 6/6 外:浅黄橙10YR 8/3,橙5YR 7/6	口縁部～頸部片	
172	SD028	弥生土器	壺	底径7.1 残高3.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粗砂を多く含む	内外:橙5YR 6/6	底部片	
173	SD028	弥生土器	壺	底径7.8 残高5.1	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粗砂を多く含む	内外:橙2.5YR 6/6	底部片	
174	SD028	弥生土器	壺	底径7.3 残高6.6	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粗砂を多く含む	内:橙5YR 6/6 外:橙5YR 7/6,黒灰7.5YR 4/1	底部片	
175	SD028	弥生土器	高杯	脚部径15.2 器高36.9	内:ヨコナデ→しぼり 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粗砂を多く含む	内外:橙7.5YR 6/6	3/4程度	
176	SD028	弥生土器	高杯	復元口径22.8 残高4.8	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの礫混ざる多く含む	内外:橙7.5YR 6/6	坏部片	
177	SD028	弥生土器	鉢	口径9.5 底径3.8 器高5.3	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色・黒色粗砂を含む	内:浅黄橙10YR 8/3 外:浅黄橙10YR 8/3,褐灰10YR 6/1	2/3程度	
178	SD028	弥生土器	器台	脚部径10.3 器高18.25	内:ヨコナデ→しぼり 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粗砂を多く含む	内外:明赤褐2.5YR 5/8	3/4程度	
179	SD028	弥生土器	器台	脚部径10.5 器高14.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粗砂を多く含む	内外:赤10R 5/8	口縁部～脚部欠損	
180	SD028	弥生土器	器台	脚部径8.9 残高14.5	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの粗砂を多く含む	内外:赤10R 5/8	2/3程度	
181	SD029	弥生土器	壺	復元口径46.8 残高6.0	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色礫混ざる多く含む	内:赤橙10R 6/6,黒灰10YR 4/1 外:赤橙10R 6/6	口縁部片	
182	SD030	弥生土器	壺	底径6.4 残高3.35	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色礫混ざる含む	内:浅黄橙10YR 8/4 外:赤橙10R 6/6,橙5YR 7/6	底部片	
183	SD031	土師器	高杯	残高6.75	内:ヨコナデ→しぼり 外:ヨコナデ	良好	微細～2mmの白色粗砂を多く含む	内:橙5YR 7/6 外:橙7.5YR 7/6	坏部～脚部片	
184	SB002	石器	打製石斧	現存長1.8 幅1.75 厚0.5 重量0.80g	—	—	チャカ小	灰褐2.5Y 7/2	先端部欠損	頁岩式
185	SB003	石器	打製石斧	現存長3.05 幅1.65 厚0.36 重量1.0g	—	—	黒曜石	黒N2/	片脚欠損	平基式
186	SB003	石器	磨製石斧	長5.95 幅1.52 厚0.4 重量5.07g	—	—	チャカ小	オリーブ黒5Y 5/1～5Y 3/1	完形	平基式
187	SB004	石器	磨製石剣	現存長6.2 現存幅4.2 現存厚1.7 重量50.7kg	—	—	炭質砂岩	5GY 6/1	小片	
188	SB004	石器	磨製石剣	現存長7.3 現存幅3.7 厚1.0 重量33.7kg	—	—	凝石片岩	5Y 5/8/	小片	
189	SB004	石器	砥石	現存長6.4 現存幅6.1 厚1.2 重量82.5kg	—	—	凝灰質細粒砂岩	5Y 5/2,5GY 8/1	小片	砥面3:4面
190	SB006	石器	石錘?	現存長3.85 幅4.56 厚0.45 重量9.76g	—	—	赤褐色泥岩	赤5YR 4/1	小片	
191	SB007	石器	磨製石剣	現存長10.75 幅4.1 厚0.87 重量62.3g	—	—	片状蛇文岩	灰褐2.5Y 6/2	基部片	

表５　出土遺物観察表５

番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
192	SR010	石器	敲石	残存長4.8 残存幅6.4 残存厚3.3 重量175.02g	—	—	粗粒砂岩	灰白5Y 7/1	小片	敲面12面
193	SR010	石器	敲石	残存長11.3 残存幅6.6 残存厚4.2 重量494.70g	—	—	長石斑岩	浅黄橙10YR 8/4	1/2程度	敲面14面
194	SR011	石器	太型蛤刃石斧	長11.2 幅5.1 厚4.2 重量409.17g	—	—	安山岩質凝灰岩	灰白10Y 7/1	刃部欠損	表面風化
195	SR018	石器	敲石	残存長4.8 残存幅4.7 残存厚3.1 重量35.58g	—	—	砂質凝灰岩	灰白5Y 7/2	小片	敲面14面
196	SR023	石器	磨製石斧	長12.6 幅6.6 厚3.6 重量503.30g	—	—	砂岩ホルンフェルス	灰白5Y 7/1	刃部完形	
197	SR024	石器	石錘?	残存長4.1 残存幅4.2 残存厚0.7 重量15.06g	—	—	凝灰質細粒砂岩	明青灰10BG 7/1	小片	
198	SD025	石器	石錘?	長4.41 幅6.05 厚0.7 重量34.0g	—	—	凝灰質細粒砂岩	明オリーブ灰2.5GY 7/1, オリーブ灰2.5GY 6/1	2/3程度	
199	SD025	石器	石錘?	残存長3.6 残存幅5.6 残存厚0.4 重量6.01g	—	—	凝灰質泥岩	5GY6/	小片	
200	SD028	石器	太型蛤刃石斧	長16.4 幅5.4 厚4.0 重量650.00g	—	—	安山岩質凝灰岩	灰白10Y 7/1	完形	表面風化
201	SD028	石器	敲石	残存長6.7 残存幅8.4 残存厚3.3 重量202.38g	—	—	凝灰質泥岩	灰白5Y 7/2	小片	敲面12面
202	SP032	石器	打製石鏃	残存長3.15 幅1.6 厚0.5 重量1.58g	—	—	姫島産黒曜石	暗灰10YR 6/1	先端部欠損	凹基式
203	SP033	石器	打製石鏃	長2.05 幅1.3 厚0.3 重量0.7g	—	—	黒曜石	黒N 1.5/	片脚欠損	凹基式
204	SP034	石器	打製石鏃	残存長2.6 幅1.2 厚0.4 重量1.53g	—	—	サヌカイト	青黒5B 7/1	先端部欠損	平基式
205	SP035	石器	敲石	残存長5.7 残存幅6.0 残存厚3.2 重量99.42g	—	—	凝灰質細粒砂岩	明オリーブ灰2.5GY 7/1	小片	敲面12面
206	SP036	石器	敲石	残存長4.7 残存幅5.3 残存厚3.0 重量96.53g	—	—	砂質凝灰岩	灰白7.5Y 7/1	小片	敲面12面
207	SP037	石器	石鏃	残存長3.0 残存幅1.4 厚0.35 重量1.10g	—	—	サヌカイト	青灰5B 5/1	片脚欠損	凹基式
208	表採	石器	石錘?	残存長3.5 幅3.1 厚0.6 重量8.8g	—	—	粘板岩	8GY 7/1	小片	
209	表採	石器	敲石	残存長5.25 幅3.2 厚1.55 重量29.8g	—	—	細粒砂岩	5C7.5Y 5/1, 灰白5Y 7/2	下部欠損	敲面13面
210	SR002	刀子	—	残存長4.7 最大幅1.8	—	—	—	—	刃部欠損	
211	SR009	刀子	—	残存長4.3 幅1.45	—	—	—	—	刃部片	
212	SP038	鉄鏃	方頭or圭頭	残存長8.0 最大幅2.5	—	—	—	—	鏃身部～脚部片	
213	SP038	鉄鏃	柳葉形	残存長2.8 最大幅0.8	—	—	—	—	鏃身部～脚部片	
214	SR010	石玉	—	厚0.35 厚0.3	—	—	滑石	青灰10BG 6/1	完形	

表6　出土遺物観察表6

第4章　結　語

以上、入覚大原遺跡E地区の発掘調査成果を報告してきた。最後に結語として、前報告の調査成果（行橋市教委 2014a）を加味し、遺跡全体の総括を行いたい。

入覚大原遺跡で人類の痕跡を確認できるのは、今から約2万年前の後期旧石器時代中頃のことである。C地区とD地区で当該期のナイフ形石器を1点ずつ発見した。縄文時代の様相は明確ではないが、続く弥生時代がこの遺跡の最初の画期となる。弥生土器の様相（武末・上田 2006）をみると、C地区で前期末（板付Ⅱc式期）の甕形土器片が数点出土しており、東にある下崎丸山遺跡（行橋市教委 2014b）と併せ、この頃から人々の継続した営みが開始される。本格化するのは中期前半（須玖Ⅰ式期）からで、この時期の竪穴建物（住居）は平面プランが円形のものと方形のものが混在する。大きさは直径（一辺）5m前後である。掘立柱建物はC地区で2棟検出できた（SB006・007）。両者は隣接し主軸が直交することから相関関係にあったと考えられる。これらの建物は発掘面積に比してあまり数は多くないことが1つの特徴である。点在するように分布し遺構が切り合う例もほとんどないことから、これらの遺構の多くが同時併存した可能性、すなわち短い期間に営なまれた可能性を指摘できる。ただ遺跡は周辺にかけてさらに広がっており、集落中心部の確認に至っていない可能性も捨て切れない。なおA地区やE地区の南辺では、この時期に掘削された集落を区画する大溝（A地区SD016、E地区SD025）が東西方向に伸びていることが分かっている。また入覚大原遺跡の弥生時代を特徴づける大きな要素がB地区とC地区で発見した墓地群である。甕棺墓14基、石蓋土壙墓1基に加え、十分な検証ができなかったが土壙墓と思われる長方形土坑が数十基ある。集落を営んだ人たちの墓域と考えることができるが、墓地の内容の充実さも未発見の集落域を想定させる拠りどころとなる。いずれにせよ、弥生時代中期においてはこの地域の拠点的集落といえる。続く後期には、本遺跡の北東にある下崎ヒガンデ遺跡に生活の拠点を移したと考えられる。この遺跡の詳細な報告はまだ行われていないが、弥生時代後期に位置づけられる竪穴建物83軒、掘立柱建物30棟などが調査されている（辛嶋 2006）。次の古墳時代前期、中期には生活の痕跡は認められない。活動が再開されるのは6世紀後半の古墳時代後期からである。ここに入覚大原遺跡の第2の画期が認められる。以前報告したA～D地区では古墳時代後期の竪穴建物は数軒しかないが、今回報告したE地区では当該期の竪穴建物が10軒前後確認されている。いずれも一辺5m前後の方形プランで、明確な竈をもつ建物はほとんど無い。集落規模は弥生時代のそれと比較してそれほど大きくなく、衛星的な集落といえる。B地区で確認した天サヤ池西古墳群はこの集落を営んだ人々の奥津城であろう。存続時期は出土土器の様相（小田・長 2006）から古墳時代後期後半から終末期初頭までの約50年と短く、先述の大溝もそれより少し遅れて埋没しており、入覚大原遺跡は人々の生活拠点としての役目を終える。

〈引用・参考文献〉

小田富士雄・長直信 2006「豊前の須恵器生産」（行橋市史編纂委員会編『行橋市史 資料編 原始・古代』行橋市）

辛嶋智恵子 2006「下崎ヒガンデ遺跡」（行橋市史編纂委員会編『行橋市史 資料編 原始・古代』行橋市）

武末純一・上田龍児 2006「弥生土器の編年と地域間交流」（行橋市史編纂委員会編『行橋市史 資料編 原始・古代』行橋市）

行橋市教育委員会 2014a『入覚大原遺跡・天サヤ池西古墳群・下崎瀬戸溝遺跡』（行橋市文化財調査報告書第51集）

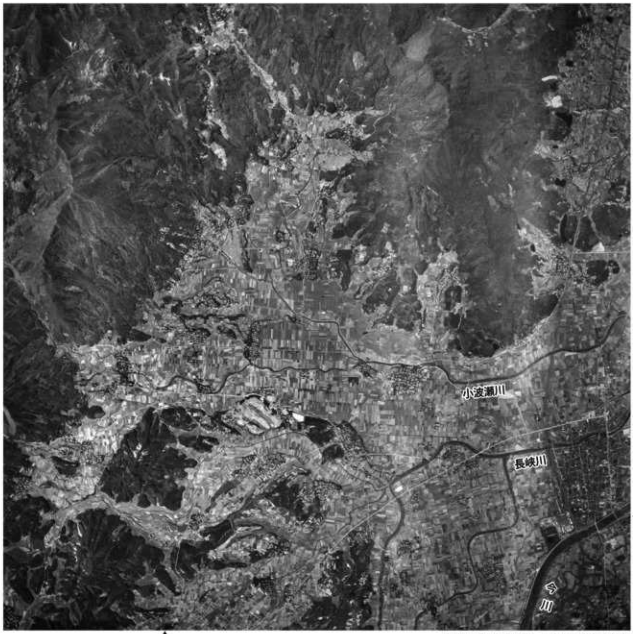
行橋市教育委員会 2014b『下崎丸山遺跡・下崎三反間遺跡』（行橋市文化財調査報告書第54集）

※本報告を行うにあたり、以下の方々に有益なご教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。（敬称略）

上田龍児（大野城市教育委員会）、梅崎惠司（公益財団法人 北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室）、

藤井厚志（北九州市立自然史・歴史博物館）、森貴教（大野城市教育委員会）

図　版

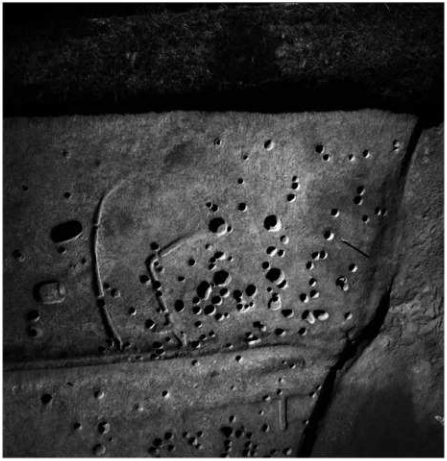


（1960 年 6 月 5 日撮影　国土地理院発行を転載）

入覚大原遺跡の位置

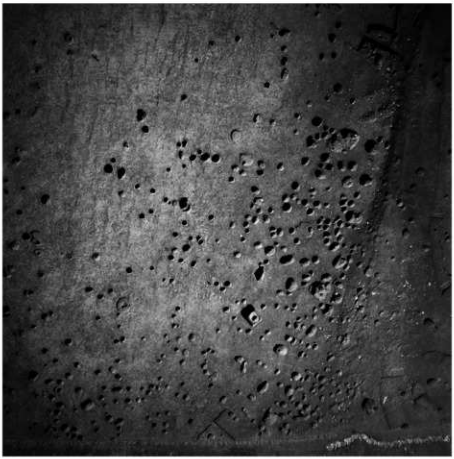
図版２　空中写真

１．調査区南東側（上が南）



２．調査区南西側（上が南）

１．調査区北東側（上が南）



２．調査区中央部（上が南）

図版４　空中写真

１．調査区北西側（上が南）

２．SI009・010 周辺（上が南）

1. SI001（西から）

2. SI002（西から）

3. SI003（西から）

図版６　竪穴建物

1. SI004、SK018（北東から）

2. SI005（南から）

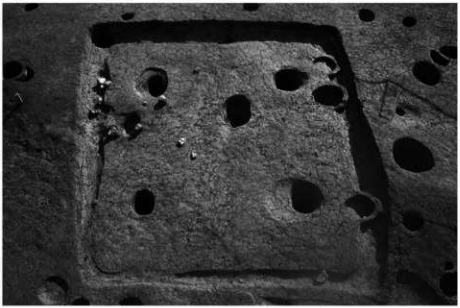
3. SI005 土器出土状況

1. SI006（南東から）

2. SI007、SK022（西から）

3. SI008（南東から）

図版８　竪穴遺物

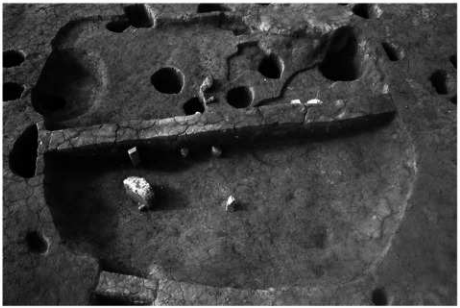


1.　SI009（西から）

2.　SI010、SD031（南から）

3.　SI011（西から）

1. SK019（南西から）



2. SK020（南東から）

3. SK023（西から）

図版 10　溝

1.　SD025 東側土層（東から）

2.　SD025 中央部土層（西から）

3.　SD025 西側土層（西から）

1. SD026（北から）

2. SD028（北西から）

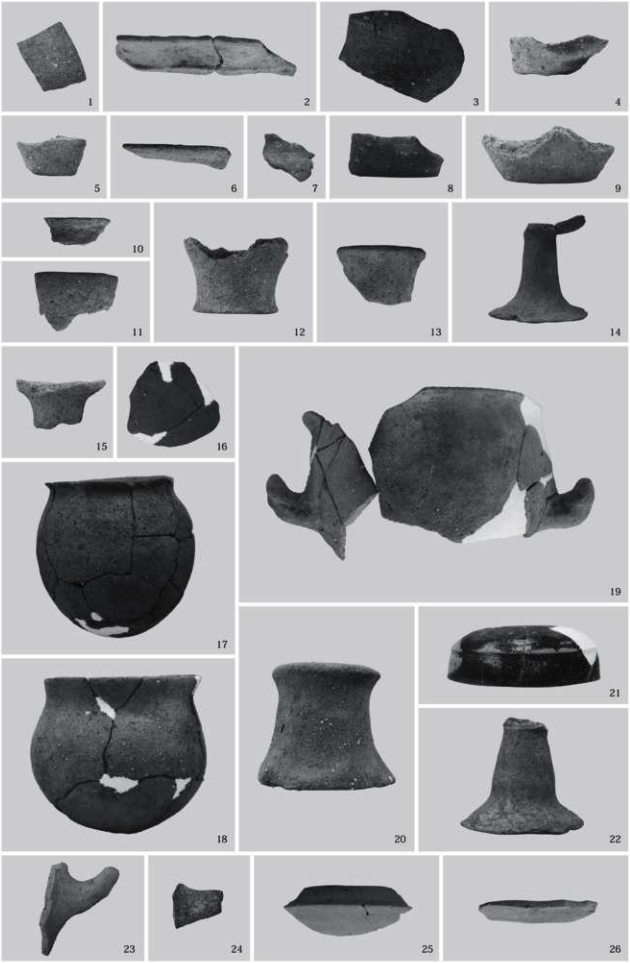
3. SI006、SD029（東から）

図版 12　柱穴・その他

1.　SP038 鉄鏃出土状況

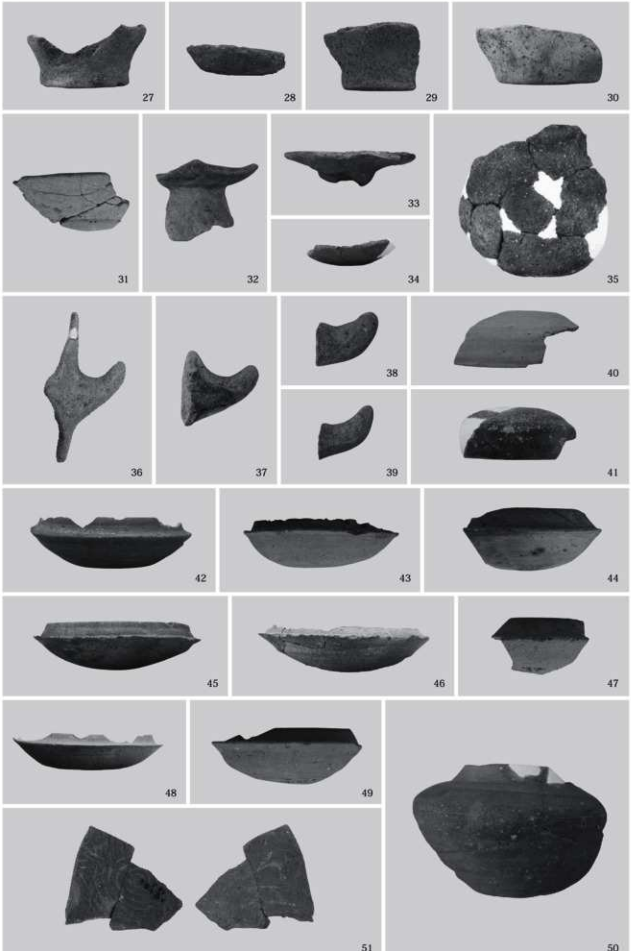
2.　発掘作業の様子

3.　調査前（南から）



出土遺物 1

図版 14　出土遺物



出土遺物 2

52

53

54

55

56

57

58

59

60

64

65

61

66

62

67

71

63

68

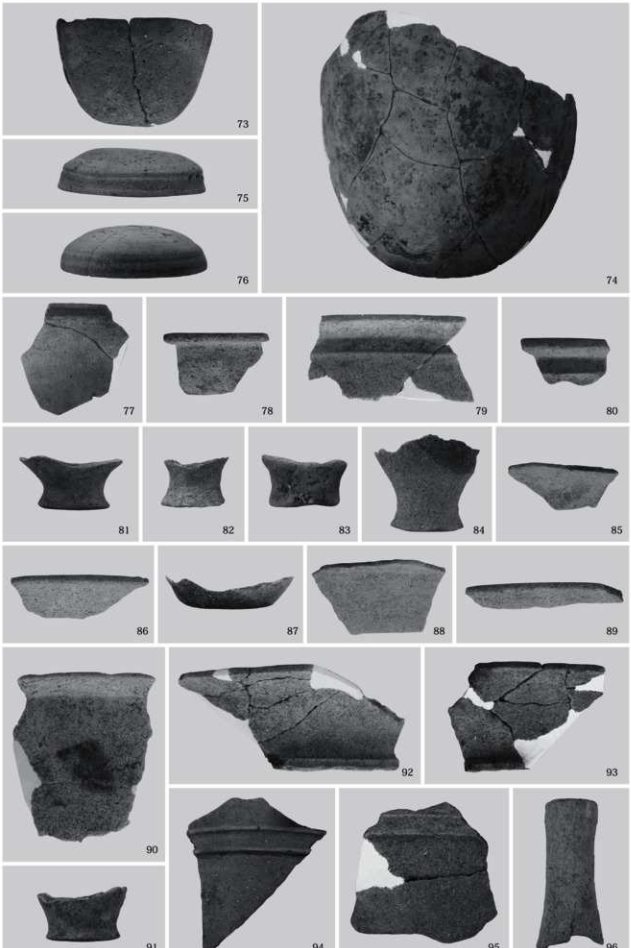
69

70

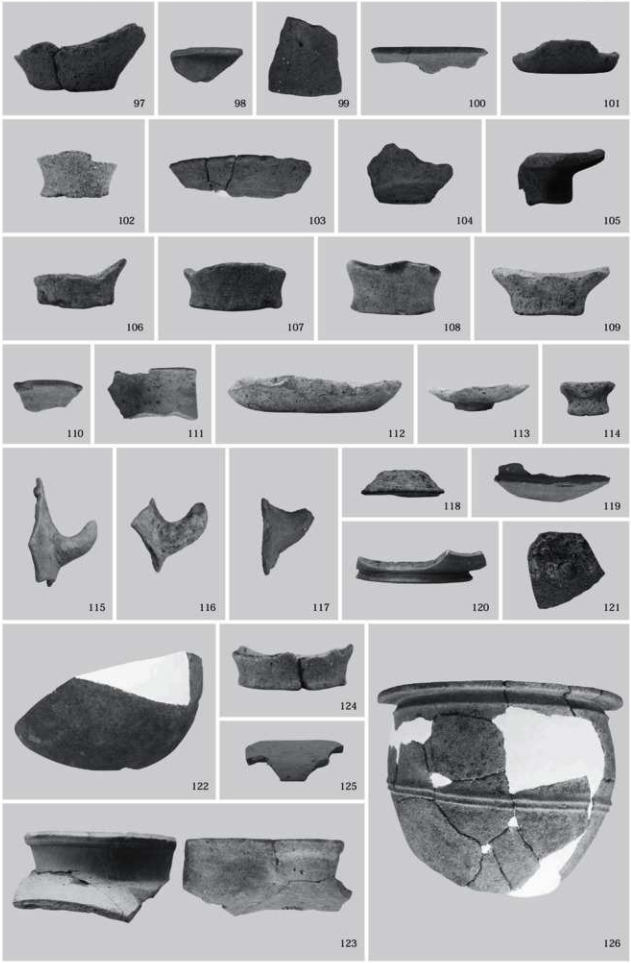
72

出土遺物 3

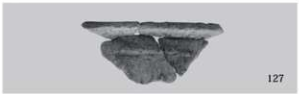
図版 16　出土遺物



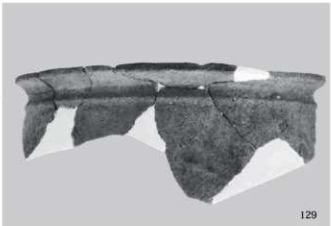
出土遺物 4


97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126

出土遺物 5


127

128


129

130

131

132

133

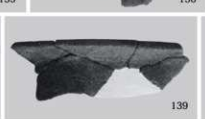
134

135

136

137

138

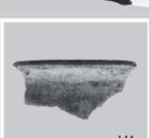

139

140

141

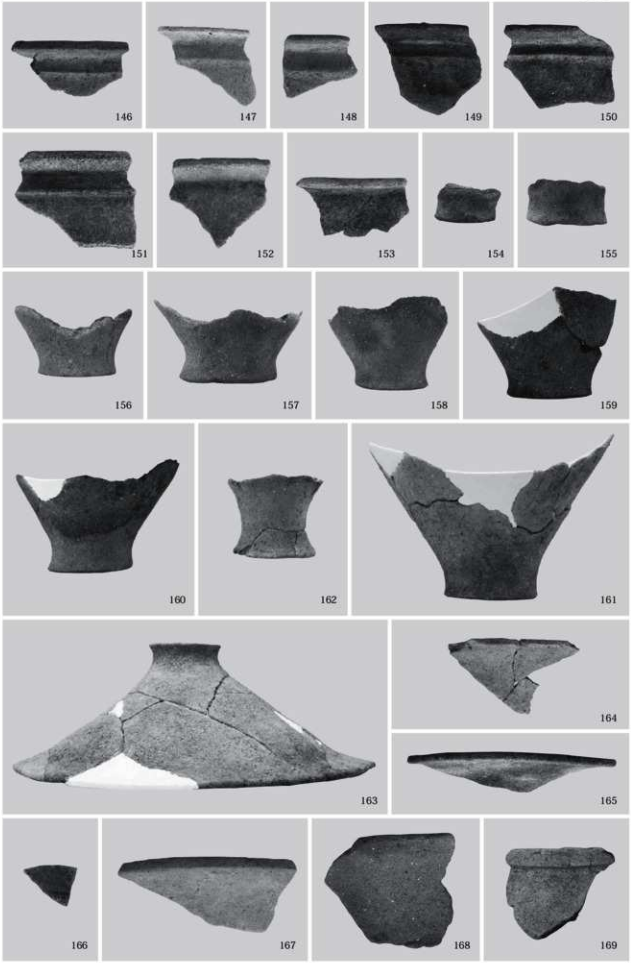
142

143


144

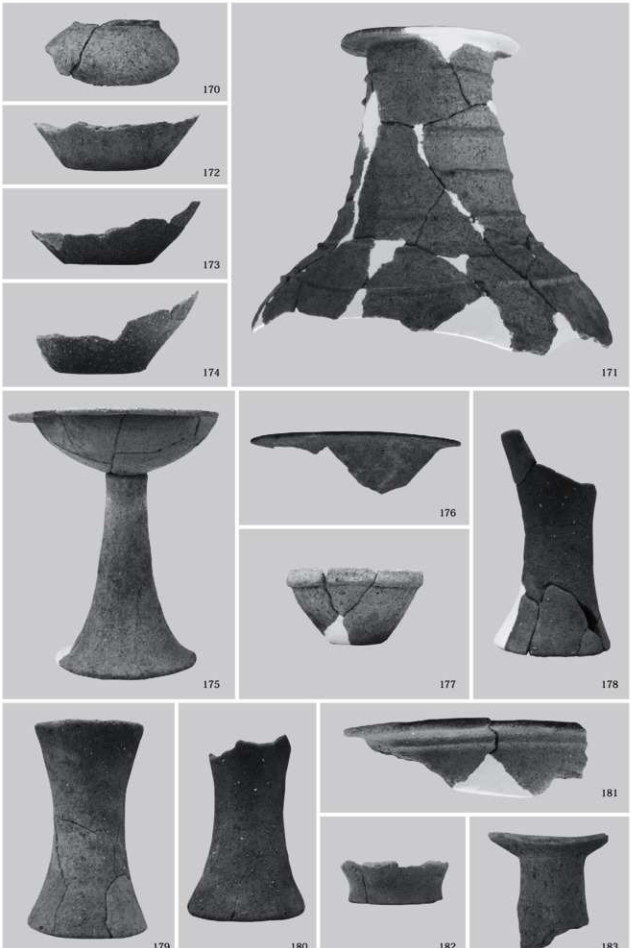
145

出土遺物 6


146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
162
161
163
164
165
166
167
168
169

出土遺物 7

図版 20　出土遺物



出土遺物 8

184

185

186

187

188

189

192

190

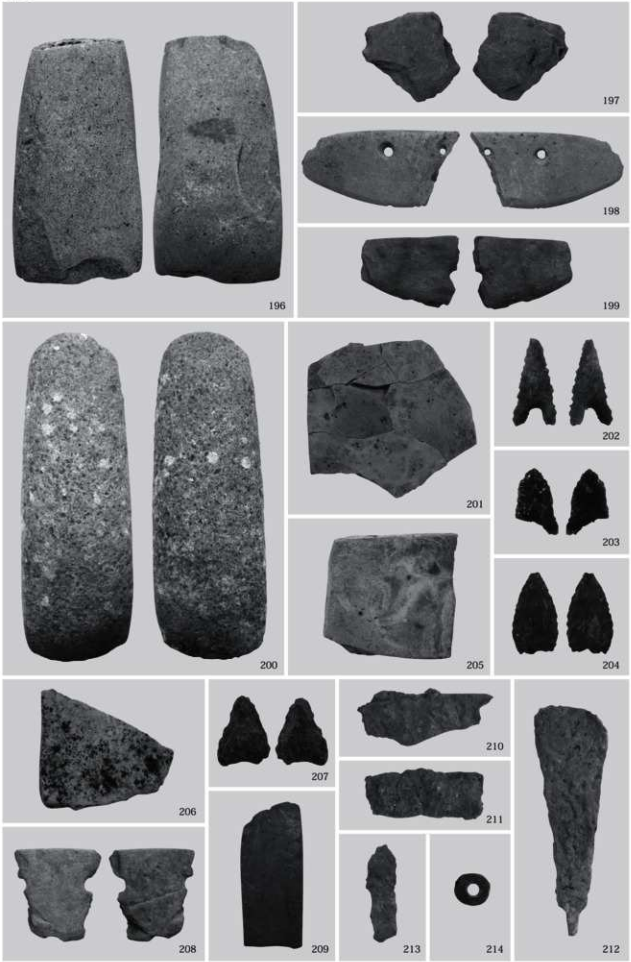
191

193

194

195

図版 22　出土遺物



出土遺物 10

報 告 書 抄 録

ふりがな	にゅうがくおおばるいせき２
書名	入覚大原遺跡２
副書名	県営ほ場整備事業（入覚地区）関係埋蔵文化財発掘調査報告５
シリーズ名	行橋市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 59 集
編著者名	山口裕平
編集機関	行橋市教育委員会
所在地	〒 824-8601　福岡県行橋市中央一丁目１番１号　TEL 0930-25-1111　FAX 0930-25-1582
発行年月日	2016 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
にゅうがくおおばるいせき 入覚大原遺跡	福岡県行橋市 大字入覚 2845、2846、2852-1、2853-1、2854、2855-1、2855-2、2856 番地	402133	14124025	33° 43′ 28″	130° 55′ 13″	19970604 ～ 19971117	2960㎡	県営ほ場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
入覚大原遺跡	集落	弥生時代、古墳時代	竪穴建物 11 軒、掘立柱建物 6 棟、土坑、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、石鏃、石斧、石庖丁、石剣、砥石、刀子、鉄鏃、白玉	なし

要約	京都平野の北西部、幸ノ山の南、標高 30m 前後の谷底平野および中位段丘に立地する。 今回発掘調査を行った E 地区では、弥生時代中期および古墳時代後期の集落を確認した。主要遺構に竪穴建物 11 軒、掘立柱建物 6 棟、数条の溝、多数の土坑、柱穴がある。多量の弥生土器、土師器、須恵器を始めとして、石鏃、石斧、石庖丁、石剣、砥石、刀子、鉄鏃、白玉などが出土した。 入覚大原遺跡は、弥生時代中期では入覚地域における拠点的集落に位置付けられ、古墳時代後期は衛星的な小集落であったと考えられる。

2016年(平成28年) 3月31日 発行

入覚大原遺跡2

行橋市文化財調査報告書 第59集

著作権所有　福岡県行橋市中央一丁目1番1号
発　行　行橋市教育委員会

印　刷　福岡県行橋市中央三丁目3番10号
有限会社 京都印刷